

### [6号墳] (第182図)

2号墳の墳丘盛土除去後に検出した古墳で、2号墳の前方部の盛土下に埋もれていたものである。立地は、標高33m程の尾根頂部の主軸より南西斜面側(6区)に寄っているものである。周溝のみを検出したもので、盛土、主体部等は確認しなかった。

周溝は、古墳の北東辺、北西辺、南東辺の各3辺をコ字形に廻るもので、斜面側(6区)では検出していない。規模は、上端で幅2m、床面で幅0.7m程を測り、深いところで地山を0.5m程掘り込んだものである。また、周溝内には、暗褐色の砂質土(第177図17層)が堆積し、その上面には、2号墳の墳丘盛土が覆っている。

コ字形の周溝で区画された墳丘部分は、第177図で分かるように、盛土の存在は認められなかった。ただし、2号墳築成時に、旧地表を削り、平坦にしていることからその時に盛土が削りとられている可能性は残る。

墳丘の規模は、現況で、北東辺で7m、北西辺で4.5m、南東辺で4mを測る。ただし、北西辺と南西辺の2辺は、本来もう少し長かったものと考えられる。以上のことから本古墳は、長径7m×短径5m程の長方形の墳丘の古墳と考えることができる。

主体部は、墳丘部分からは検出しなかった。2号墳の築成時に、ある程度上面が削りとされていることから、消失している可能性が考えられる。ただし、2号墳と同様の横穴墓を主体部とする可能性も否定できない。その理由として、墳丘が斜面側に片寄った位置に築かれている点、下方斜面に墳丘中軸にほぼ沿って6区8号横穴墓が存在する点が挙げられる。周辺の古墳、外の調査区の状況から、横穴墓を主体部とする所謂「後背墳丘」の可能性は高いものと考えられる。もし、そうであるならば、築造時期は、6区8号横穴墓と同一の6世紀後半頃と考えられる。

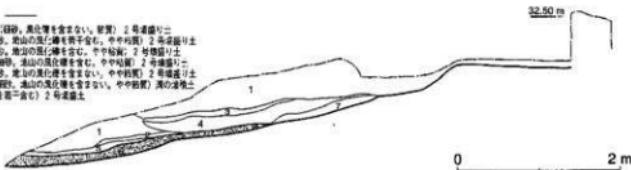
### [7号墳] (第182図)

2号墳の墳丘盛土除去後に確認でた古墳で、2号墳の後方部の盛土下に一部埋もれていたものである。立地は、標高32m程の南側に向かう尾根に存在する。周溝のみを検出したもので、盛土、主体部等は確認しなかった。

周溝は、古墳の北東辺、北西辺、南東辺の各3辺をコ字形に廻るもので、斜面側(6区)では検出していない。規模は、上端で幅3m、床面で幅0.7m程を測り、北側コーナーの深いところで地山を1m程掘り込んだものである。また、周溝内には、淡赤茶褐色の砂質土(第183図6層)が堆積し、その上面には、2号墳の墳丘盛土が覆っている。

コ字形の周溝で区画された墳丘部分については、表土下15cm程で地山を検出しておらず、盛土の存在は認められなかった。流失している可能性も残るが、本来存在していない可能性が高い。

- 1 斧石一塊状灰岩土 (固結、表面層は含まない、乾燥) 1号埴輪土
- 2 淡赤茶褐色土 (崩壊、地山の風化と堆積を含む) やや粘軟 2号埴輪土
- 3 淡赤茶褐色土 (崩壊、地山の風化と堆積を含む) やや粘軟 2号埴輪土
- 4 淡赤茶褐色土 (崩壊、地山の風化と堆積を含む) やや粘軟 2号埴輪土
- 5 淡赤茶褐色土 (崩壊、地山の風化と堆積を含む) やや粘軟 2号埴輪土
- 6 淡赤茶褐色土 (崩壊、地山の風化と堆積を含む) やや粘軟 2号埴輪土
- 7 淡赤茶褐色土 (崩壊、地山の風化と堆積を含む) やや粘軟 2号埴輪土



第183図 5区7号墳土層実測図 (S=1:60)

墳丘の規模は、現況で、北東辺で7m、北西辺で5.5m、南東辺で5.5mを測る。ただし、北西辺と南西辺の2辺は、本来もう少し長かった可能性も考えられる。以上のことから本古墳は、長径7m×短径5.5mの地山を周溝で区画した正方形に近い墳丘の古墳と考えることができる。

主体部は、墳丘部分からは検出しなかった。流失の可能性は残るが、2号墳と同様の横穴墓を主体部とする可能性が考えられるその理由として、墳丘が斜面側に寄った位置に築かれている点、下方斜面に墳丘中軸にほぼ沿って6区6号横穴墓が存在する点が挙げられる。周辺の古墳、他の調査区の状況から、横穴墓を主体部とする所謂「後背墳丘」の可能性は高いものと考えられる。もし、そうであるならば、築造時期は、6区6号横穴墓と同一の6世紀後半頃と考えられる。

#### [8号墳] (第182図)

2号墳の墳丘盛土除去後に検出した古墳で、前方部の盛土下に埋もれていた。標高32m程の尾根の北西側に立地し、2号墳の地山成形時に削られ、南西側の周溝のみが残存している。周溝は、南西側で8m程直線的に延び、南東側からやや弧状を呈すものである。規模は、上端で幅1.2m、床面で幅0.5m程を測り、深さは0.2mと非常に浅いものである。また、周溝内には、暗褐色の砂質土が堆積している。墳丘の規模については、大部分が削平され、詳細は不明であるが、検出した周溝から径8m程の古墳と考えられる。なお時期については、2号墳築造以前としか分からぬ。

#### [10号墳一箱式石棺一] (第184図)

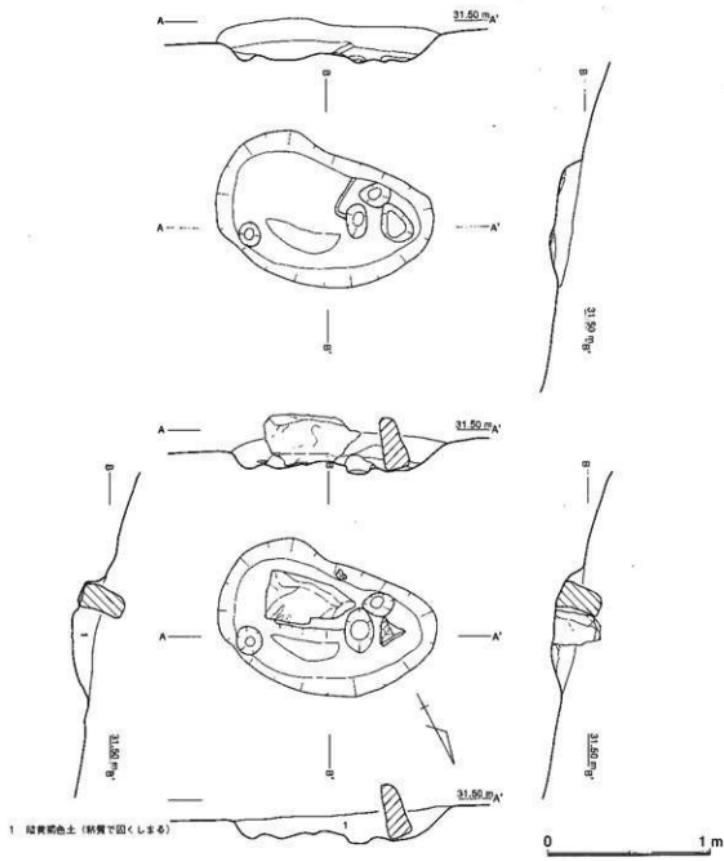
2号墳の後方部北側の墳壠付近で検出したもので、小形の箱式石棺と考えられるものである。標高32.5mのところに立地し、調査前から石材が地表面に露出していたものである。

石棺は、主軸をN-44°-Wにとり、南西側の側石と北西側の小口石のみが残存している。他の部分の石は失われている。側石は、長さ60cm、高さ32cm、厚さ18cm程を測る自然石を使用している。一方、小口石も長さ23cm、高さ33cm、厚さ14cmほどの同質の石材を用いている。また、床面には、石材の設置されていたと考えられる浅い凹みを検出している。凹みは、1か所認められたが、石材の痕跡が推定される確実なものは、側石の北東側に認められた。その凹みは、長さ42cm、幅10cmのもので、側石とほぼ長さが一致し、対応する位置であることから間違えないものと考えられる。なお、小口石に対応するものは、検出しなかった。

さて、側石と小口石、及び側石の痕跡から、石棺内部の空間を復元すると幅20cm、長さ70cm、高さ24cm程と推定される。非常に狭い空間となり、この石棺の性格として、乳児用または、改葬用の2つの可能性が考えられるものである。

石棺を納めている墓壠は、やや不整形な楕円形を呈し、長径134cm、短径82cmを測り、深さは現状で20cm程である。その覆土は、暗黄褐色の粘質土であった。

墳丘盛土等については、検出していないが、調査前から石材が露出している状況であったことから本来盛土が存在していた可能性は考えられる。また、2号墳の墳壠部分との間に溝状に浅く凹む部分を検出しており、この石棺に伴う可能性も考えられる。なお、遺物は、出土しておらず、時期については不明であるが、2号墳の墳壠に沿って存在していることから、何らかの関係ある古墳である可能性が考えられるものである。



第184図 5区10号墳(箱式石棺)実測図(S=1:30)

### [3号墳] (第182、185、186図)

尾根上の調査区の西端に位置し、標高35.5mで遺跡内で最高所に立地している。調査当初は、2号墳と同一の墳丘とし、全長50m程の前後円墳の後円部と想定していたものである。

調査前の地形(第175図)では、北東部の標高34.5m付近で傾斜の緩やかな部分が存在し、墳裾の可能性が想定された。しかし、頂部では、北東部で土壠状の高まりを残して、広い平坦面が存在し、後世の改変が著しく認められた状況であった。

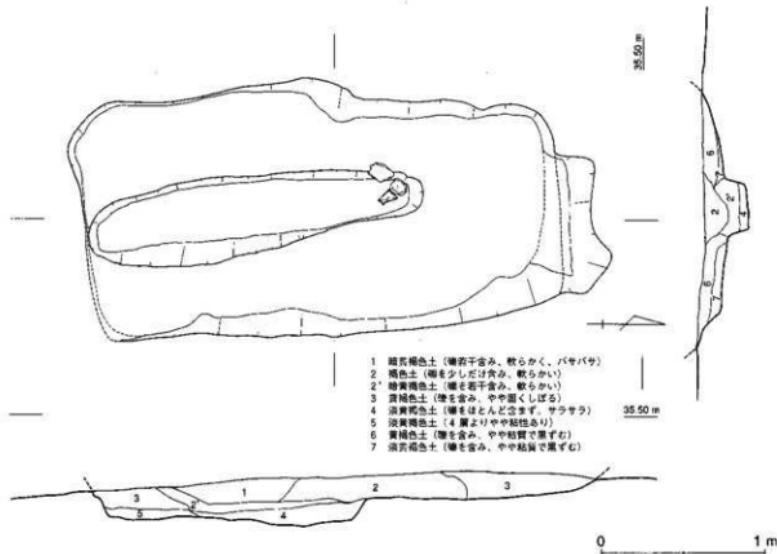
**墳丘(第186図)** 北東部分のみが現状を留めており、南東部は2号墳に、南西部はSD01に、北西部は9号墳に削平されている。よって墳裾は北東部で確認できるのみである。それは、上層図(第186図)のAラインから7mのところのやや傾斜が変化する位置にあるものと考えられる。そして、

平面的に見ると弧状をなすことから、円墳であると推定できる。また、この部分は、調査前の墳裾の想定位置とほぼ一致するものである。なお、調査時に土層図（第186図）では、Aラインから南へ6mのところで、やや傾斜が変化する部分が認められ、当初は墳裾の可能性を考えていた。しかし、北東部の墳裾とは対応しないことから、本古墳には、伴わないものとして判断している。さらにSD01についても、同様の理由から伴わないものと考えた。

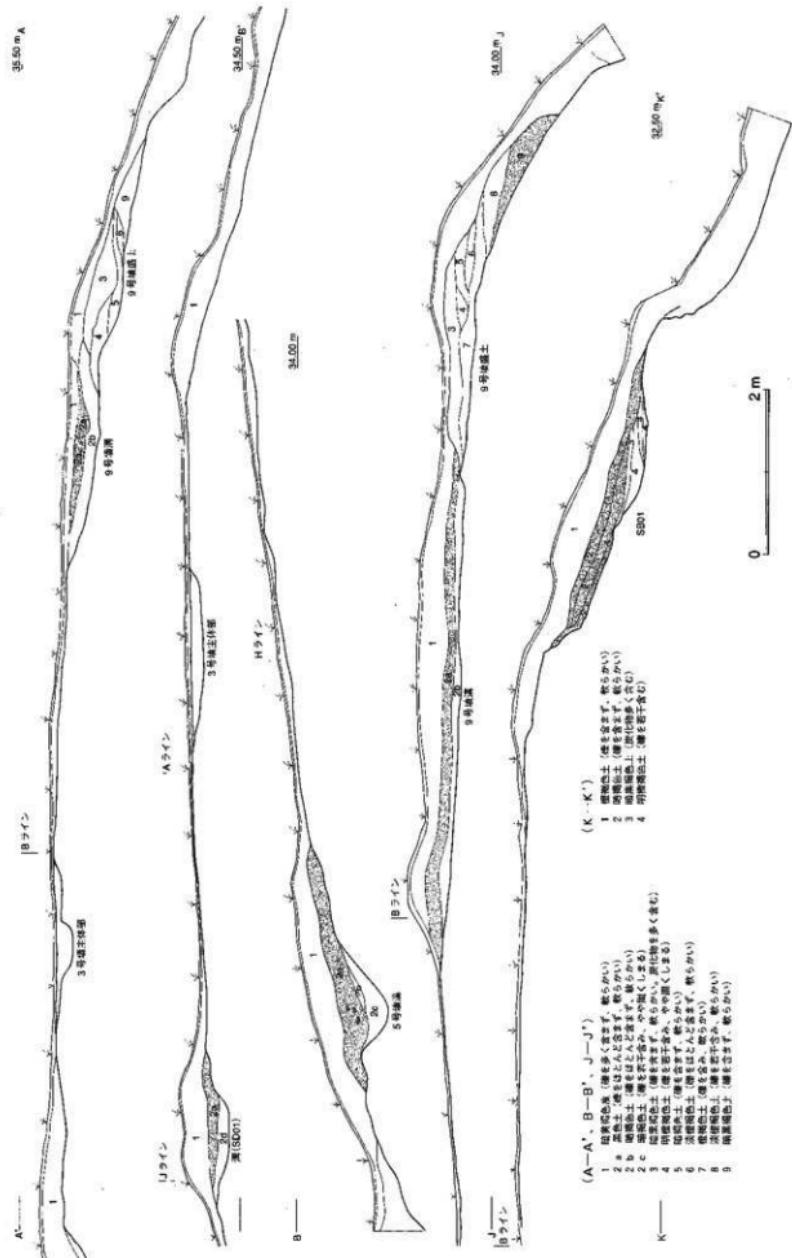
墳丘の規模は、後述する主体部の中心から墳裾まで5.5mを測ることから、径11mの円墳と考えられる。また、墳丘盛土については、土層図（第186図）からも分かるように確認していないが、20cm以上は、削平されていることから、本来は盛土が施されていた可能性は残る。

**主体部（第185図）** 主軸をN-1°-Wにとるもので、2段に掘り込まれた墓壙内に木棺を納めたと考えられるものである。なお、上半は削平によって失われている。墓壙の規模は、一段目で、長さ3.14m、幅1.54m、深さ1.35mを測り、床面は平坦に加工されている。2段目は、一段日の南側面に接するように片寄った位置に掘られ、長さ2.08mを測り、幅は、北辺で0.28m、南辺で0.4mと南側が広い楕円形に近い平面を呈す。南側が幅広であることから、頭位は南である可能性が考えられる。深さは0.13mを測る。そして、床面は平坦に加工されている。

墓壙内の覆土は、大きく地山疊を含む黄褐色系の土と含まない褐色土（2・2'層）に分けられる。1・3・6・7層は、1段目のみで見られ、水平に堆積し、一方、2・2'層は、2段日の墓壙周辺に見られ、2層はU字形に堆積している。以上の様相から1・3・6・7層は、墓壙内埋土、2・2'層は、墓壙内流入土と考え、2段目の墓壙には木棺が存在し、その腐朽後に2・2'層が流入したものと解釈した。また、2段目の墓壙床面の4・5層は、木棺安置のための整地土である可能性が高い。



第185図 5区3号墳主体部実測図 (S=1:30)



第186図 5区3・5・9号 sondage、SB01周辺土層剖面図 (S=1:60)

出土遺物は認められなかったが、2段目の北辺付近から石が3点出土している。これは、2'層上面から出土し、木棺の上に置かれていた可能性が考えられるものである。

本古墳の時期については、2号墳に削られていることから6世紀後半以前であることは間違いないものである。また、北側に延びる尾根上（7区）には、古墳時代中期の古墳群が存在している。その一連のものとするならば、明確な根拠はないが、古墳時代中期の年代を与えることも可能である。

### 【5号墳】(第182、186図)

調査区の南西側にある尾根の標高29m付近で検出した古墳である。立地は、尾根頂部の平坦部の端に存在し、南側の斜面（6区）に近いところである。周溝のみを検出したもので、盛土、主体部等は確認しなかった。

周溝は、古墳の北東部を廻るものだけが残存しており、西側は、SB01に伴う平坦面によって削平されている。残存部は、上端幅1~2m、床面幅0.2~0.6mで、長さ4.2mを測るものである。プランは、コ字形、または、弧状を呈す、どちらかの可能性が考えられるが、残存部からは、明確に判断出来なかった。また深さは、地山から深いところで0.5mを測る。

周溝内覆土（第186図）は、自然堆積土と考えられ、その上面の2a層からは、須恵器片が出土している。平面的には、北側付近に集中している。（第187図）

周溝で囲まれた墳丘部分は、盛土は認められなかった。本来、盛土が施されたものが、流失している可能性も考えられるが、現状では不明である。また、その規模については、残存部が少なく、明確にはできない。

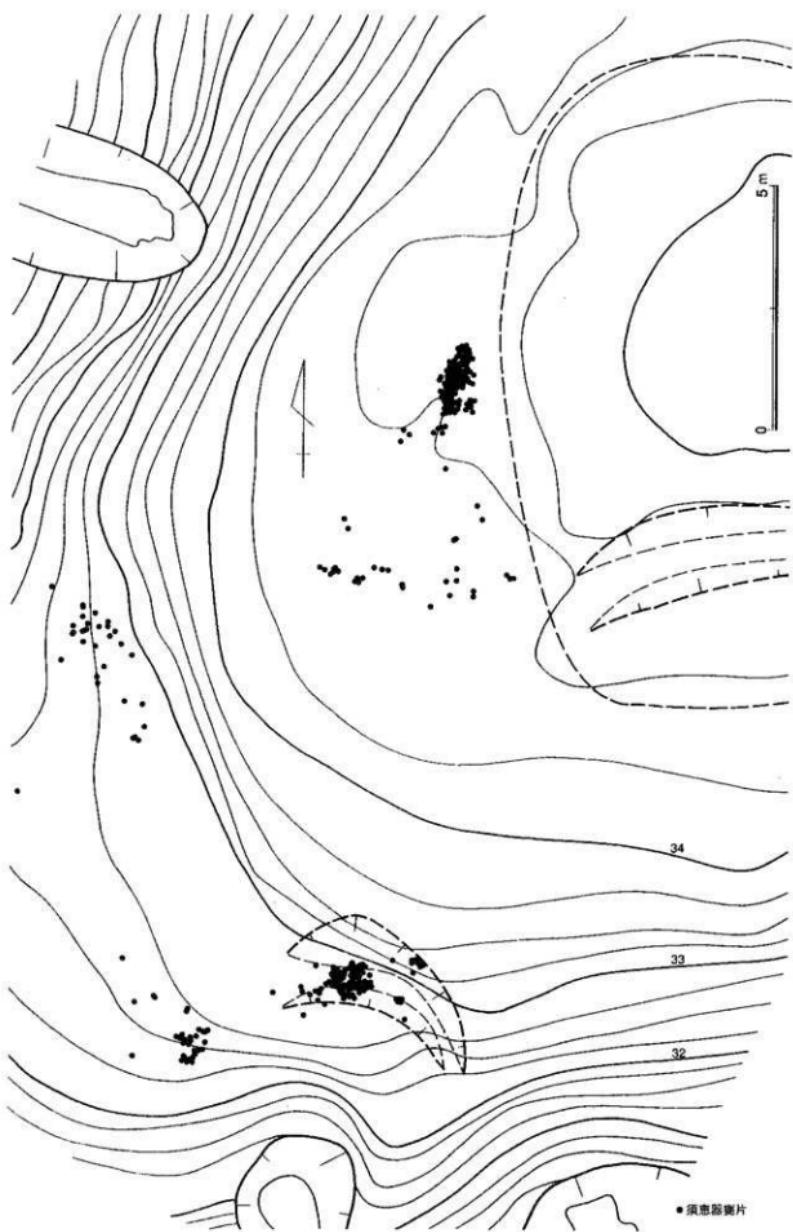
主体部は、墳丘部分からは検出しなかった。主体部は、上砂の流失で失われている可能性も考えられるが、2号墳と同様の横穴墓を主体部とするものとして考えた。その理由として、墳丘が斜面側に片寄った位置に築かれている点、周溝から須恵器片が出土している点、下方斜面に6区12号横穴墓が存在する点が挙げられる。また、本古墳が、横穴墓を主体部とする「後背墳丘」とした場合、横穴墓との位置関係から規模は、7m程の円形又は、方形の墳丘として推定することが可能である。そして、時期についても6区12号横穴墓と同一の6世紀後半と見ることができる。

### 【9号墳】(第182、186図)

調査区の西端の標高31m付近で確認した古墳である。立地は、尾根頂部の平坦から斜面に変わる付近になる。なお、調査時に、観察を怠ったために、墳丘盛土を除去してしまっている。よって墳丘規模、墳形についての詳細な情報を得ることが不可能な古墳である。唯一、土層（第186図）から、推測が可能なものである。

墳丘盛土が確認された土層ベルトは、Aラインとそれと並行する南側のJラインの2本である。両者で認められる盛土が同一の墳丘のものであるとの明確な根拠はないが、おそらく、同一のものと考えられる。Aライン（より北側）で確認できる墳丘盛土は、旧表土（9層）上に地山礫を含む土を施したものである。そして、盛土の及ぶ範囲は長さ2.3m程である。また、平坦部側には、溝が認められる。これは、平坦部を地山から30cm掘り下げたもので、墳丘盛土と対応していると考えられる。そして、規模は、上端幅2.8mを測り、覆土の2a層からは、須恵器片が出土している。

Jライン（より南側）で確認できた盛土は、Aライン同様に旧表土上に盛土を施したもので、その



第187図 5区5・9号墳、遺物出土状況実測図 ( $S = 1:100$ )

範囲は、長さ 4m 程を測り、A ラインで確認したものより広いものである。また、平坦部側には、上端の幅 5.3m を測る広い溝が認められる。これは、墳丘と対応したもので、地山を 15cm 程浅く掘ったものである。溝内の覆土からは、須恵器甕片が出土している。

以上の土層観察結果から、東西で 4m (J ラインから推定)、南北で 5m (A ラインから J ラインの距離) 以上の墳丘盛土の施された範囲が推測可能である。また、その墳丘は、東側に周溝が廻るものと考えられる。また、周溝が存在すると思われる土層ベルトに挟まれた区域からは、須恵器甕片が集中して出土している。

主体部については、土層観察部分からは確認していないが、墳丘の大部分を調査によって除去しているので、存在していた可能性は十分考えられる。ただし、調査結果から、横穴墓を主体部とする古墳であったと考えている。

その理由として、斜面付近に墳丘が立地している点、下方斜面に 1 号横穴墓が存在する点、周溝内から須恵器甕片が出土し、1 号横穴墓の墓道出土の甕片と接合関係にある点が挙げられる。

時期については、明確にできないが、1 号横穴墓に伴うものと考えた場合には、築造時期は、6 世紀後半と推測できる。

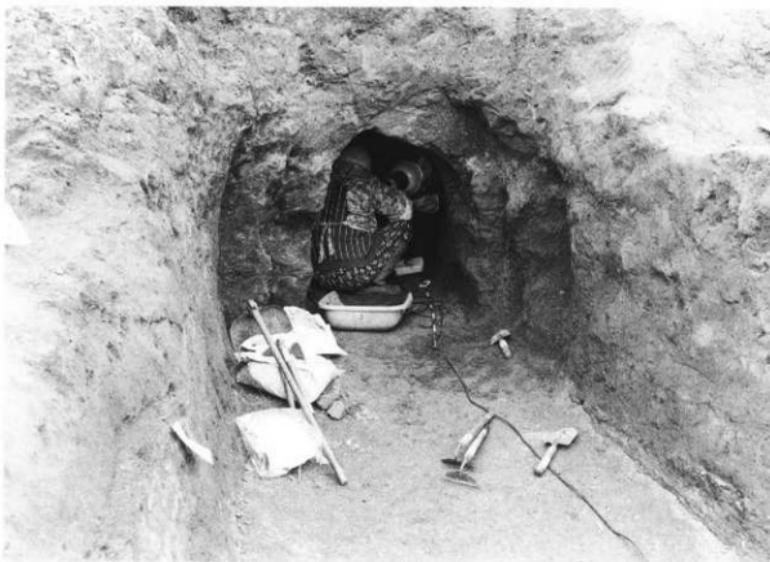


写真 3 横穴墓・玄室内調査風景

## (2)横穴墓

### [1号横穴墓]

**立地** 調査区の西北に面した丘陵斜面に穿たれ、標高30mの位置に存在している。また、北側には2号横穴墓が存在し、2穴で小支群を形成している。また、同一斜面には3基の築造途中と考えられる横穴状の遺構が存在している。

**墓道** (第188図) 地山が深いところで、2.3m掘削し、全長は5.7mを測り、やや狭長の前庭部を造りだしている。前端部床面の幅1.0m、玄門付近の幅1.2mと玄門部側で若干広がる。床面は玄門部に向かって徐々に高くなり、比高差は0.4mである。

**玄門** (第188図) 墓道中央に穿たれ、閉塞用の剝込をもつものである。奥行1.45m、幅0.8m、高さ0.83mを測る。横断面は、床面側が広がる台形に近いが、天井部はやや丸みを持つもので、側壁との界線は不明瞭なものである。規模は、床面幅1.0m、奥行0.2m、高さ1.08mを測り、玄門部より一段天井部が高くなる。正面から見た場合は、長方形を呈す。

**閉塞石** (第189図) 閉塞には、割石を使用しており、検出時には、上半部は失われていた。右は、床面直上から3段ほど積み上げられた状況で検出している。

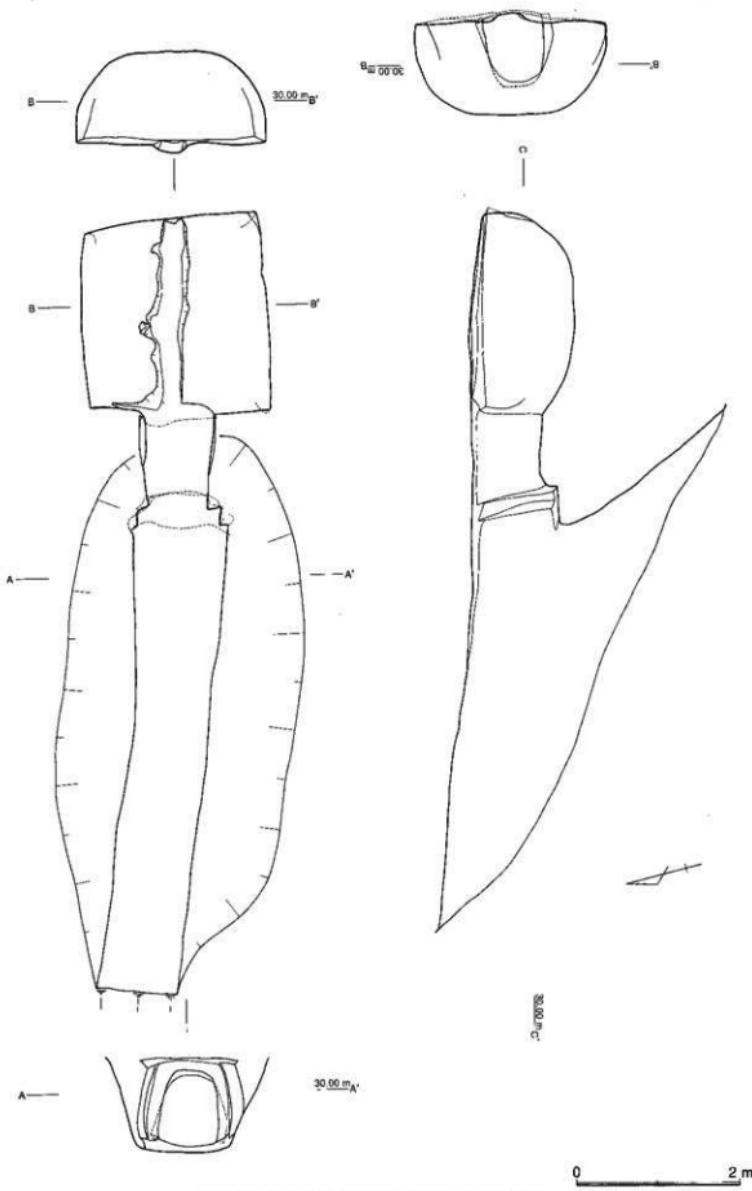
**玄室** (第188図) 上軸はN-76°-Wをとり、平面形は若干奥行の長い長方形を呈す。奥行2.48m、幅は奥壁で2.1m、前壁で2.2mを測る。また、前壁右袖で2.24m、左袖で2.14mを測り、右袖がやや幅広のものである。床面には溝が中央主軸に沿って掘られており、上端で幅32~43cm、深さ9cmを測る。この溝によって左右に屍床を設けている形になる。

また、立面の縦断では、奥壁は丸みをもって天井部に至るもので、横断面も同様に丸く仕上げられている。床面から天井部までの高さは、1.3mである。

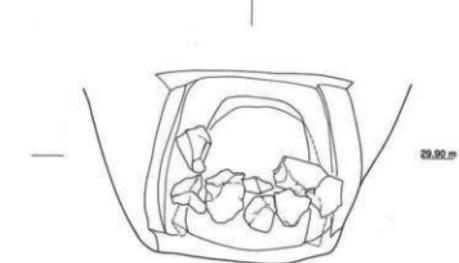
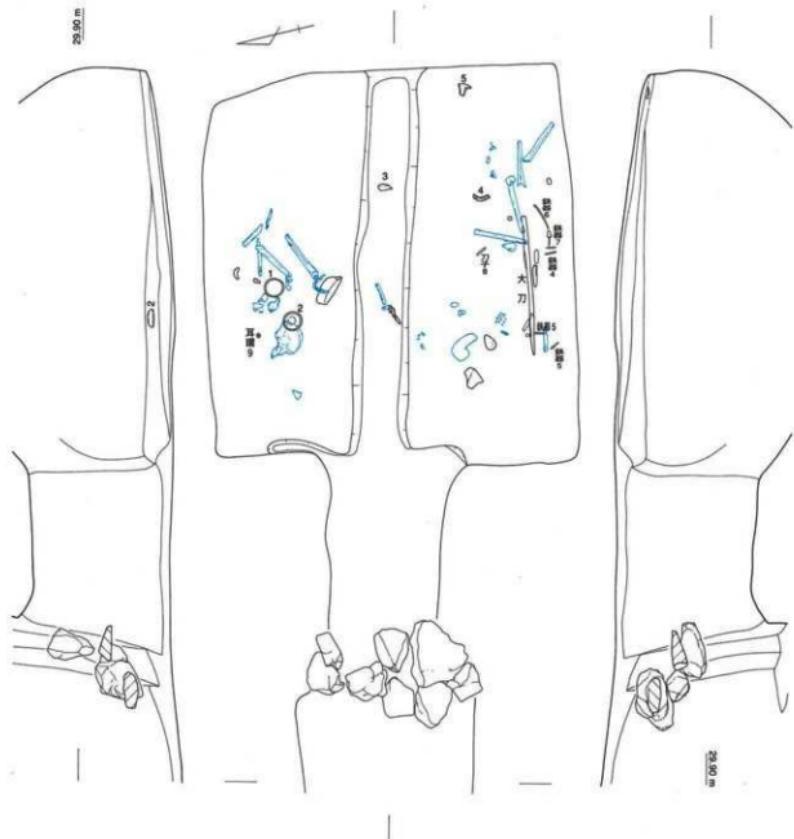
**埋土堆積状況** (第190図) 土層は、大きく見て5層群に分けることができた。1層は、基本的に礫を含まない層であり、流土及び、玄室内流入土と考えられる。ただし、1c層と1d層は、礫を含むことから埋土の可能性が考えられる。可能性として最終埋葬に伴う埋土であると考えられる。また、その下面である最終埋葬面は、閉塞石の上面に対応することから、閉塞石の上半部分が除去された時期は、この段階と推定される。2層は、最終埋葬時の掘削土と考えられ、その上面から閉塞石と同質の石材が出上している。3層は、腐食の著しい黒色土(3a層)と礫を含む3b~g層からなり、第3次埋葬に伴う埋土と推定されるものである。ただし、3f層は、暗橙褐色土で、やや腐食している可能性が考えられることからこの層と下層の3g層は、別の埋葬に伴う埋土の可能性も残る。4層は、第2次埋葬時の埋土と考えられるもので、上層の4a層は、礫を含まない軟らかいもので腐食している。5層は、初葬時の埋土と考えられるもので、礫を多く含む層である。

以上の土層観察結果から4回以上の埋葬の可能性が推定される。

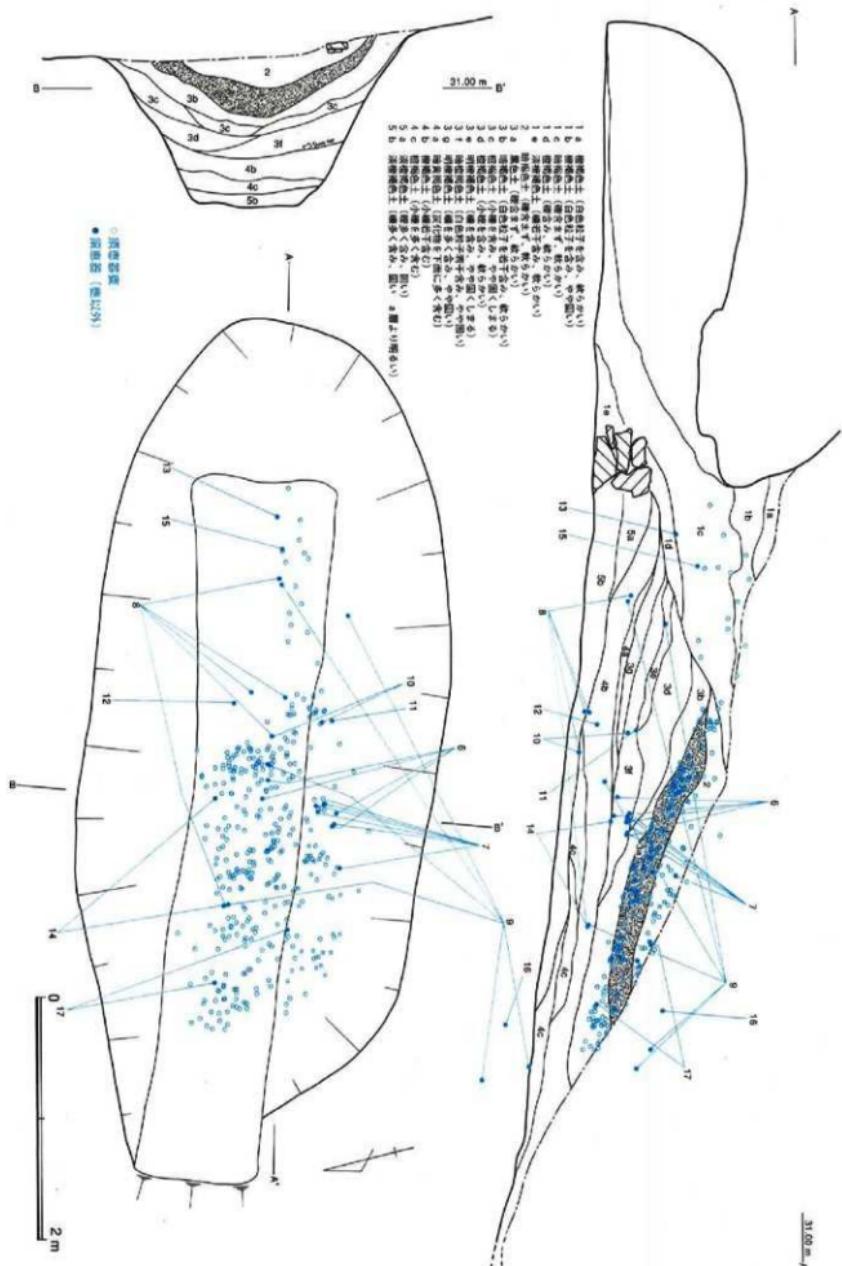
**遺物出土状況** (189、190図) 墓道では、基本的に黒色土(3a層)、2次埋葬面(5層上面)、3次埋葬面(4層上面)から出土している。黒色土からは、多數の須恵器碎片と蓋坏(第191図16、17)が出土している。黒色土は第3次埋葬に伴う埋土上に形成された腐食土と考えられるものであるから、甕は、前庭部の埋め戻し後に散布されたものと考えられる。2次埋葬面からは、蓋坏(第191図8、12)が出土し、3次埋葬面からも蓋坏(第191図6、7、11、13)が出土している。また、蓋坏で2次、3次埋葬面の両方から出土しているものが存在する。(第191図9、10)



第188図 5区1号横穴墓遺構実測図 ( $S = 1:60$ )



第189図 5区1号横穴墓閉塞石・人骨・遺物出土状況実測図 (S = 1:30)

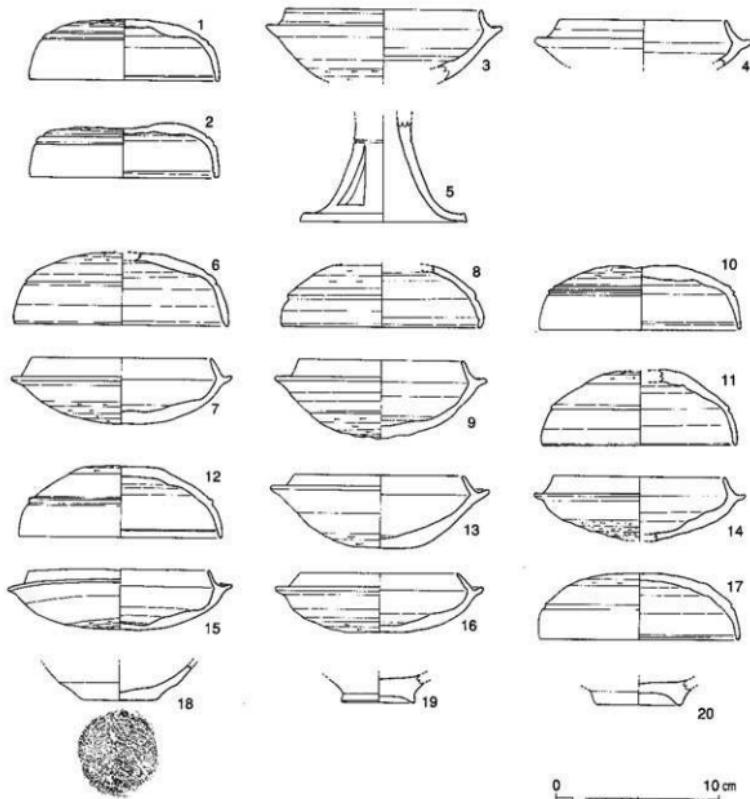


第190図 5区1号横穴墓土層・墓道遺物出土状況実測図 (S=1:40)

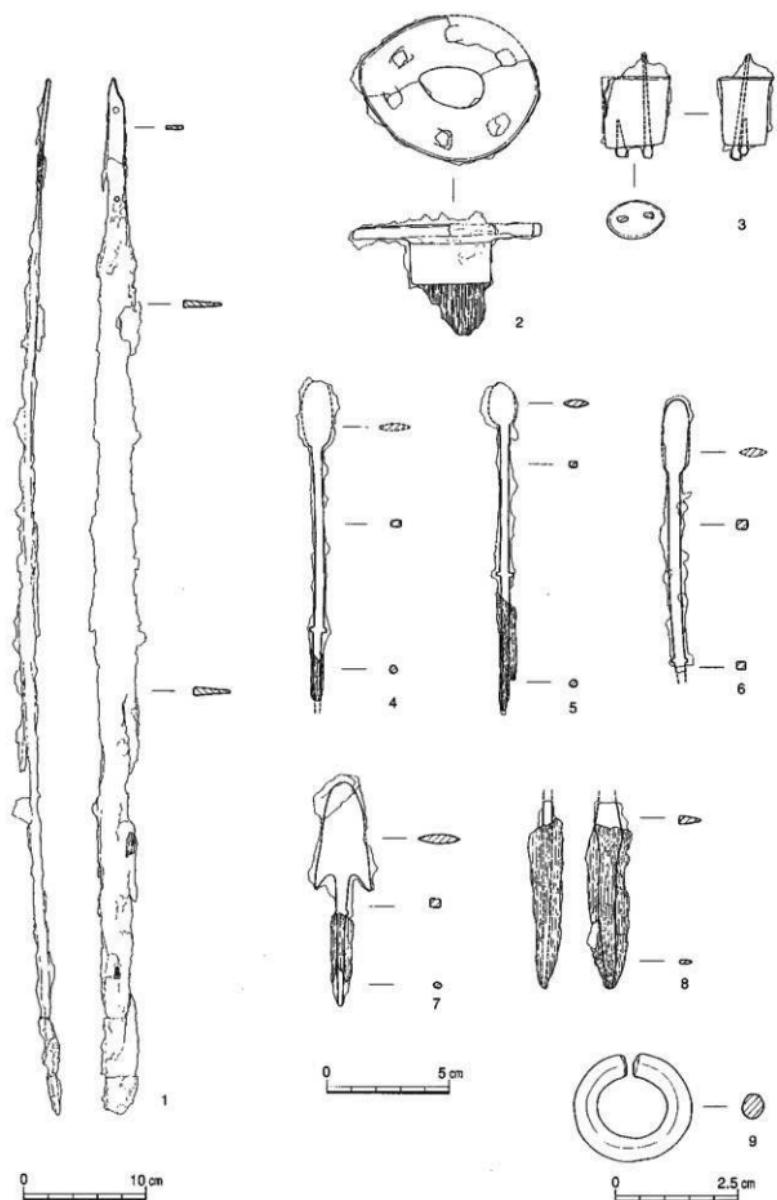
玄室内では、大きく左右の屍床の2群に分かれて出土している。右側からは、大刀（1、2、3）鉄鏡（4～7）刀子（8）といった鉄器類と須恵器、人骨が出土し、左側からは、人骨、須恵器、耳環が出土している。また、左側の頭蓋骨の下からは、須恵器蓋が出土し、枕である可能性が考えられる。

#### 出土遺物（第191、192図）

出土した須恵器蓋环は、胎上から5つに分類した。1類（1、2）は、赤褐色で硬い焼きで玄室内から出土している。2類（6、7）は、赤褐色で焼きのやや甘いもので、蓋の径13.2cmで大きめで、立ち上がりも高いものである。3類（8～14）は、淡灰色を呈すもので、特に8、9、12は、非常に良く似たものである。4類は、暗灰色を呈すものである。5類は、表面は淡青灰色で断面は赤褐色を呈すものである。なお、4、14はそれ以外のものである。以上の分類の前後関係は、口径や調整から2類—1、4類—3類の順で新しくなるものと考えている。また、大谷分類では、A4及びA5型にそれぞれ対応するものと考えられる。



第191図 5区1号横穴墓出土土器実測図 (S = 1:3)



第192図 5区1号横穴出土金属器実測図 (S = 1:4、1:2、1:1)

それぞれの類型の出土状況は、2類が3次埋葬面から、3類が2及び3次埋葬面の両方にまたがって、1類が最終埋葬時の埋土から、5類が黑色土からそれぞれ出土している。また、18～20は、1層から出土し、上方の尾根に伴っていた遺物が流入したものと考えられる。

時 期 出土須恵器から築造は、大谷4期と考えられる。埋葬も大谷4期の中で終了しているものと考えられる。

## [2号横穴墓]

立 地 1号横穴墓の北側に穿たれ、標高31mの位置に存在している。天井部が崩落により失われているものである。

墓 道（第193図）地山を深いところで、1.3m掘削し、全長は2.4m、床面幅0.96mを測り、やや短めの狭い墓道を造りだしている。

玄 門（第193図）前庭部中央に穿たれ、閉塞用の縫込をもつものである。奥行1.1m、閉塞部側の幅0.56m、玄室側の幅0.94mと玄室側に広がるものである。高さは、天井部が崩落しており不明確であるが、閉塞石の状況などから0.91m程と推測される。縫込部は、幅0.94m、奥行0.18mを測り、高さは、閉塞石の状況から1.09m程と推定される。また、床面に幅21cm、長さ94cmの溝が掘られたものである。

閉 塞 石（第194図）閉塞には、削石を使用しており、床面直上に大形の石を2段に積み上げ、その周囲を拳大の石で隙間を埋めるように詰められてた状態で検出している。

玄 室（第193図）上輪はN-58°-Wをとり、平面形はやや幅広の長方形を呈す。奥行2.05m、幅は奥壁で2.46m、前壁で2.4mを測る。また、前壁右袖で1.69m、左袖で2.1mを測り、左袖がやや幅広のものである。

一方、立面の縦断では、奥壁は丸みをもち、側壁も同様に丸く立ち上がるものである。天井部は、失われて不明であるが、おそらく、丸く仕上げられ、天井部までの高さは、1.07mと推定される。

埋土堆積状況（第193図）土層は、大きく見て6層群に分けることができた。1層は、基本的に礫を含まない層で、玄室の天井部崩落後の流土と考えられる。2・3層は、地山礫のブロック状のもので構成され、天井部の崩落土と考えられるものである。4・5・6層は墓道埋土と考えられるもので、上層の4層は、腐食し、暗褐色を呈し、また下層の5・6層は礫を多く含むものである。

以上の土層観察結果から本横穴墓では、追葬の形跡が認められないと判断した。

遺物出土状況（第194図）玄室内では、奥壁右コーナー付近と右側中央部の2個所に集中して須恵器の出土が認められた。

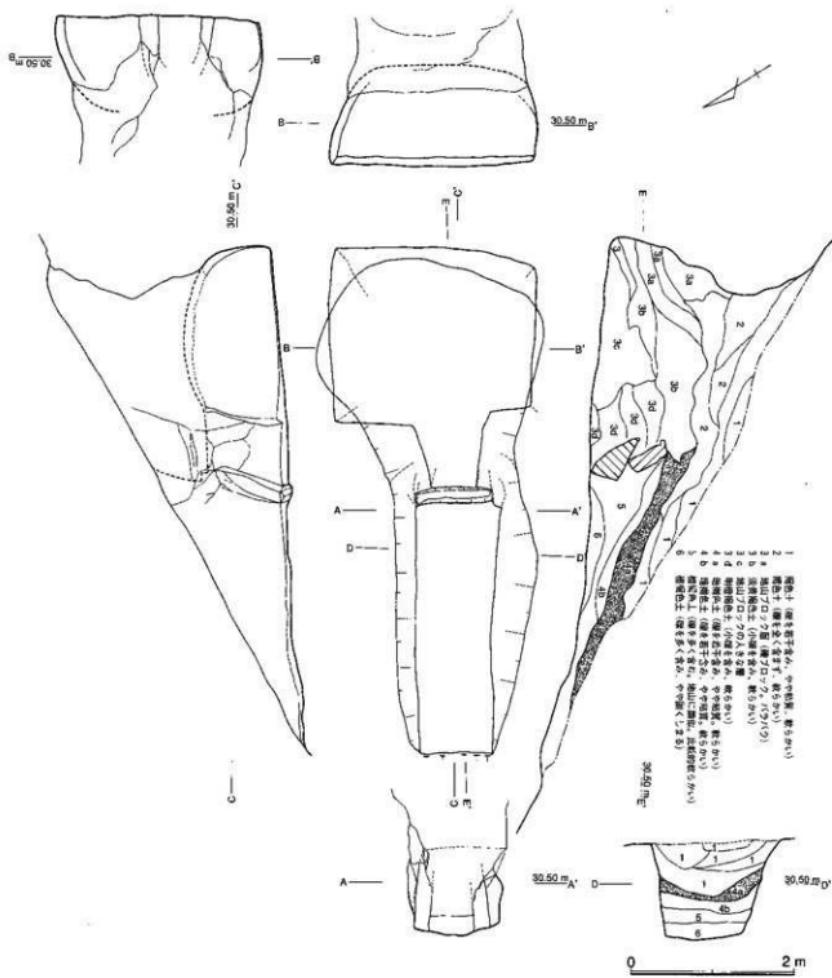
奥壁右コーナー付近からは、蓋と短頸壺が出土している。その出土状況から、蓋は短頸壺の蓋として転用されたものであった可能性が考えられる。一方、右側のものは、蓋壺10点、直口壺1点が出土している。また、玄室内の左側コーナー付近でガラス小玉が86点出土しているが、出土位置を明確に抑えられたものは、9点だけであり、他のものは埋土水洗時に検出した物である。

出土遺物（第195、196図）出土した須恵器蓋壺は、胎土、焼成から4つに分類した。1類（1）は、焼きの甘いもので白色を呈したものである。2類（2～5）は、やや焼きの甘いもので、蓋の端部がシャープなものである。3類（6～8）も、2類と同じ焼成で、蓋の端部を丸くおさめるものである。

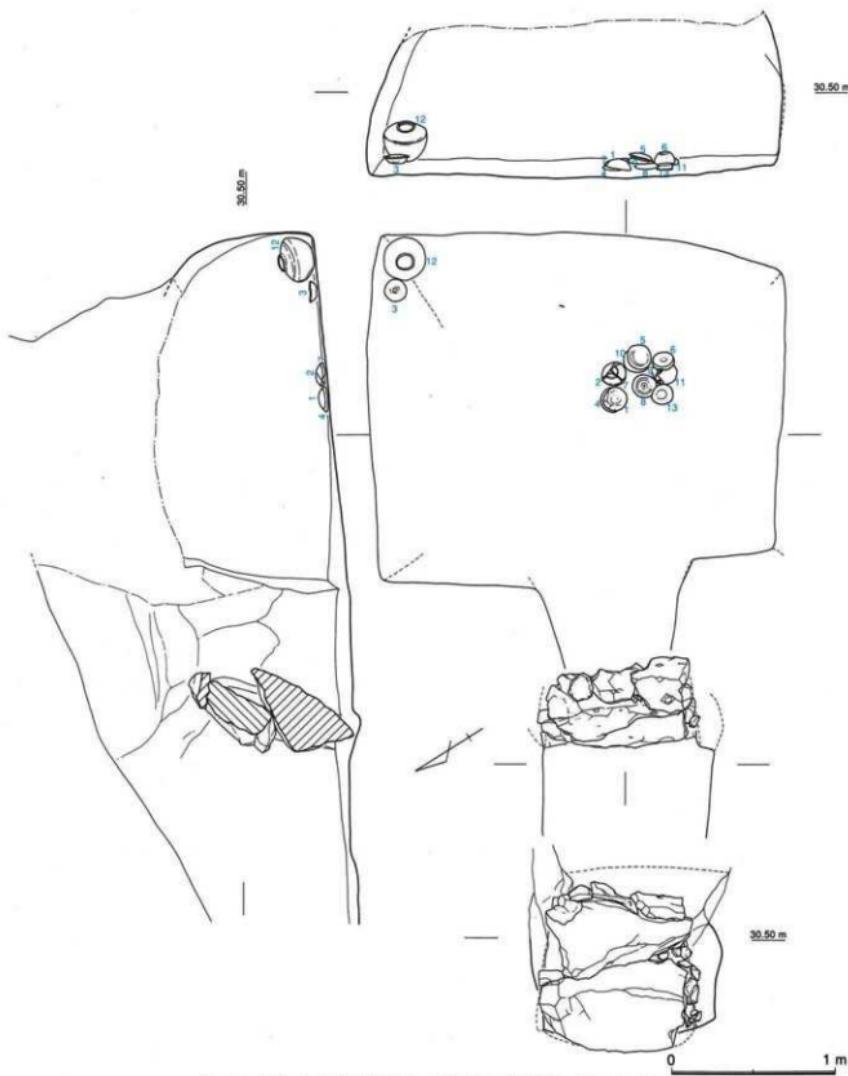
4類は、焼成の良好なもので、締まったものである。これらは、焼成に違いはあるが、須恵器蓋の口径が13.5～14.0の中でおさまり、壺の立ち上がりの高さも良く似ていることから、ほぼ時期的には前

後しないものと考えられる。また、大谷分類では、A3型に対応するものである。

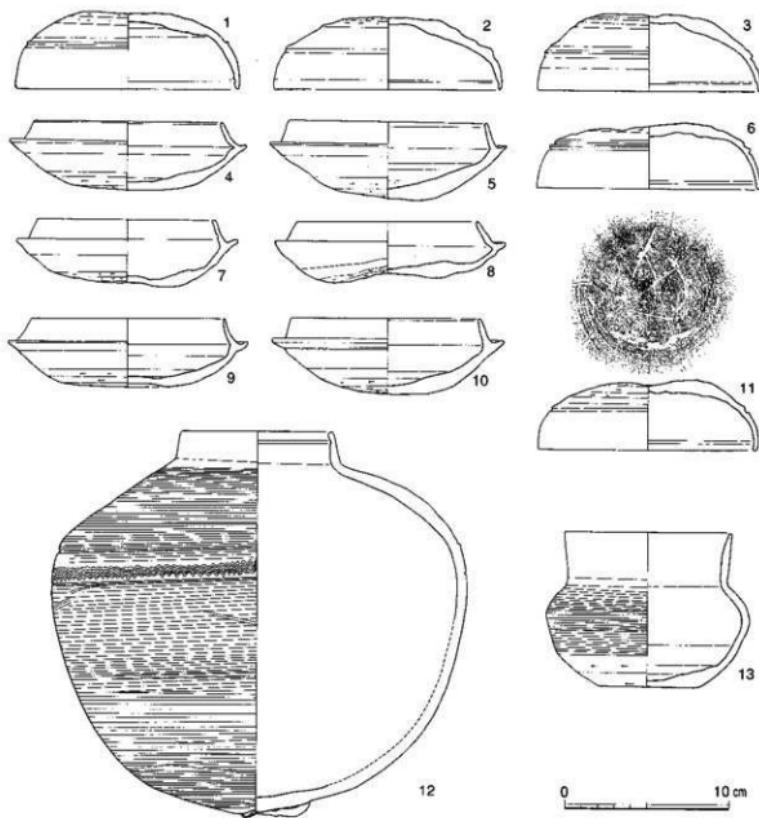
時 期 出上須恵器から築造は、大谷 3 期と考えられる。また、墓道の埋土の状況と須恵器の型式から、埋葬は 1 回だけであり、追葬はなかったものと考えられる。



第193図 5区2号横穴墓遭構実測図 (S=1:60)



第194図 5区 2号横穴墓閉塞石・遺物出土状況実測図 (S = 1 : 30)



第195図 5区2号横穴墓出土須恵器実測図 ( $S = 1 : 3$ )

②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	—
⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯	⑯
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
⑰	⑱	⑲	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	—
⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
61	62	63	64	65	66	67	—	—	—	—	—	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
80	81	82	83	84	—	—	—	—	—	—	—	—
㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛	㉜	㉝
80	81	82	83	84	—	—	—	—	—	—	—	—



第196図 5区2号横穴墓出土ガラス小玉実測図 (S = 1 : 1)

### [3号横穴] (第197図)

2号横穴墓の北側に存在する細長の土壇で、標高31mに位置し、主軸はN-49°-Wをとる。

規模は、上端で長軸の水平距離3.2m、斜距離3.65m、短軸1.26mを測り、地山を0.6m程掘り下げている。床面は、北西端部から水平に1.1m程続いた後に、傾斜が急になる。また、床面には径78×56cm、深30cm程の橢円形の凹みが認められた。

覆土は、4層に分かれるものであるが、すべて自然に堆積したものであると考えられる。

遺構の性格については、明確にできないが、床面に水平な部分が存在し、斜面に立地している点から、横穴墓の墓道の掘削途中のものと判断した。なお、出土遺物は無く、時期は不明である。

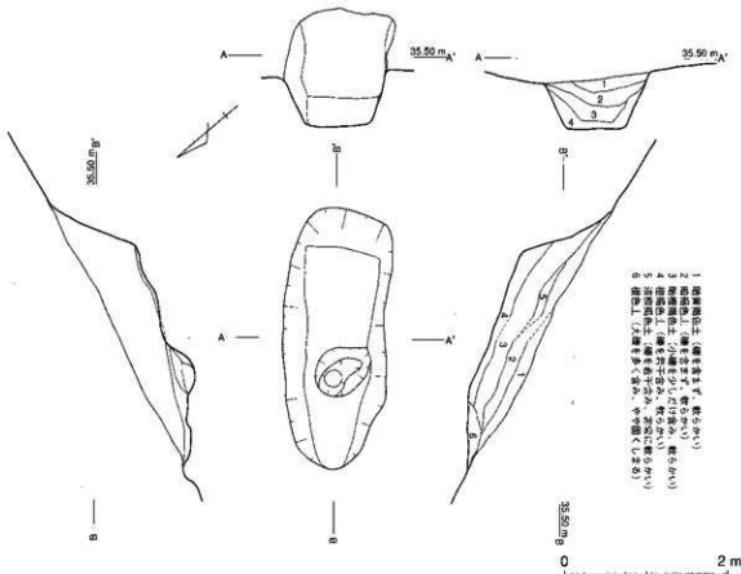
### [4号横穴] (第198図)

1号横穴墓の南側で検出し、尾根頂部からあまり降らない標高30m付近に立地している。

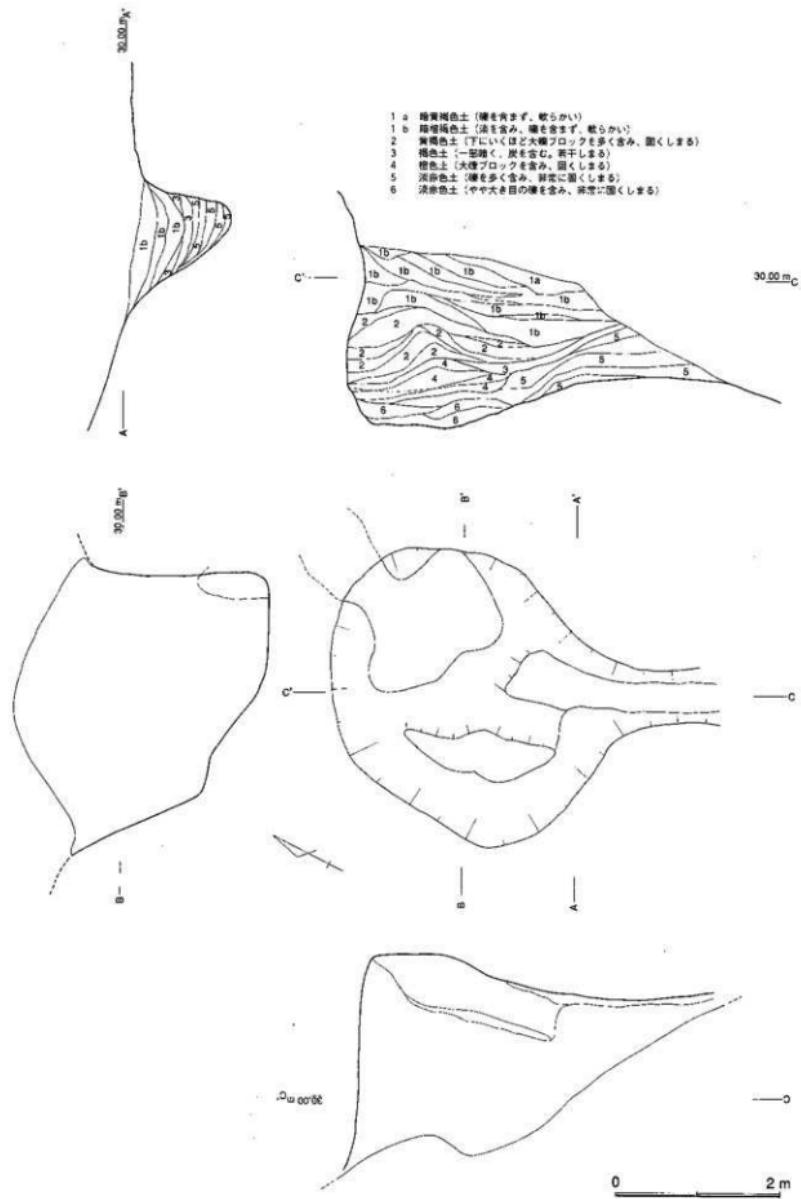
形状は、不整椭円形を呈す土壇部分に墓道に類似した狭い切り通しが付くものである。また、土壇の南壁には、トンネル状の横穴が穿たれている。

墓道状の切り通し部分は、地山を1.1m程掘り込み、床面は平坦である。全長1.2m、幅0.36m程を測り、奥側では、幅が0.7mと広がる。また、広がる部分で傾斜が変わり、土壇床面の平坦面にいたる。

土壇部分は、上端で長径3.7m、短径3.0mを測り、深さは地山から2.2m程である。床面には、3個所の平坦な部分が認められ、その1つは切り通し部分に繋がる。北東側の平坦面は、最大幅0.62mの不整形な三日月状を呈し、南側の平坦面は、トンネルに繋がり、最大幅1.80mの不整形なものである。



第197図 5区3号横穴道構実測図 (S=1:60)



第198図 5区4号構造実測図 ( $S = 1:60$ )

トンネル状の横穴は、奥行 1m 以上、幅 0.65m、高さ 1.09m を測り、横断面は、楕円形を呈す。

覆土は、大きく 6 層群に分かれ、1 層は、地山礫を含まないことから自然堆積土と考えられる。4、6 層は、地山礫のブロックを多く含む層であることから、土壤部分には、本来天井部が存在し、それが崩落したものが 4、6 層である可能性が考えられる。3、5 層は、地山礫を含み、墓道部分に堆積したものである。これは、人為的な埋土の可能性が考えられる。

遺構の性格については、明らかにできないが、人為的に掘られたものと考えられ、また、墓道状の切り通し部分は、埋められた可能性が強いものである。なお、時期については、不明である。

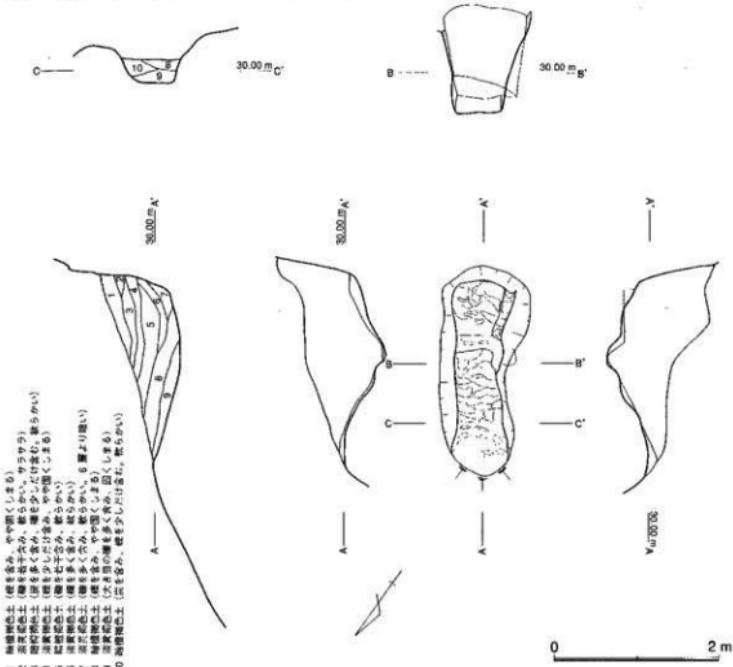
### [5号横穴] (第199図)

1号横穴の南側に近接した縦長の土壤で、標高30mに位置し、主軸はN-37°-Wをとるものである。

規模は、上端で長軸の水平距離 2.52m、斜距離 2.73m、短軸 0.83m を測り、深いところで地山から 0.98m 掘り下げる。床面は、1.4m 程度奥に向かって低く傾斜した後、南壁にむかって高く傾斜するものである。また、床面には、粗い丸刃の工具による幅約 15~20 cm の加工の痕が認められる。

覆土は、基本的に自然に堆積した流土と考えられる。

遺構の性格については、明確にできないが、横穴墓の墓道部分の掘削途中のものと判断した。なお、遺物は出土せず、時期については不明である。



第199図 5区5号横穴実測図 (S=1:60)

### (3)掘立柱建物跡

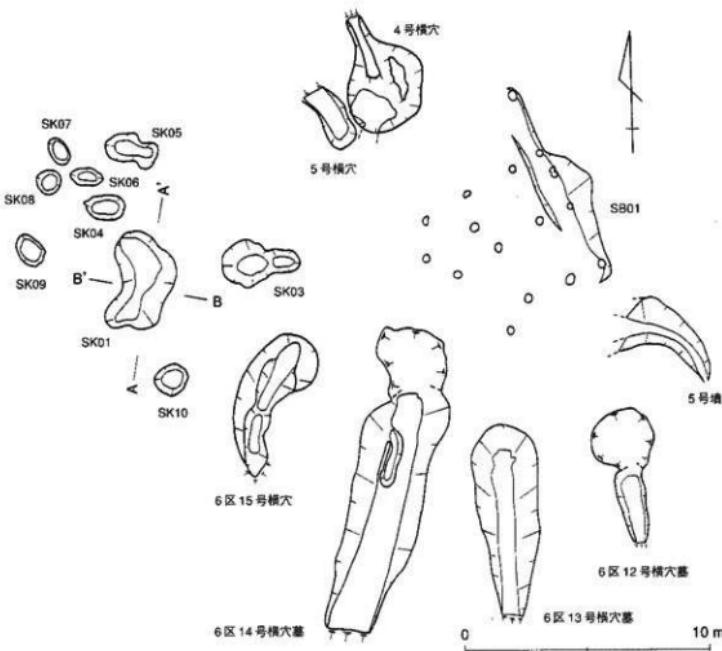
#### [SB 01] (第201図)

調査区の西侧尾根上の標高33m付近で検出した掘立柱建物跡である。遺跡の存在する丘陵で標高が最高になる尾根上付近に存在する点が、特徴的な建物跡である。

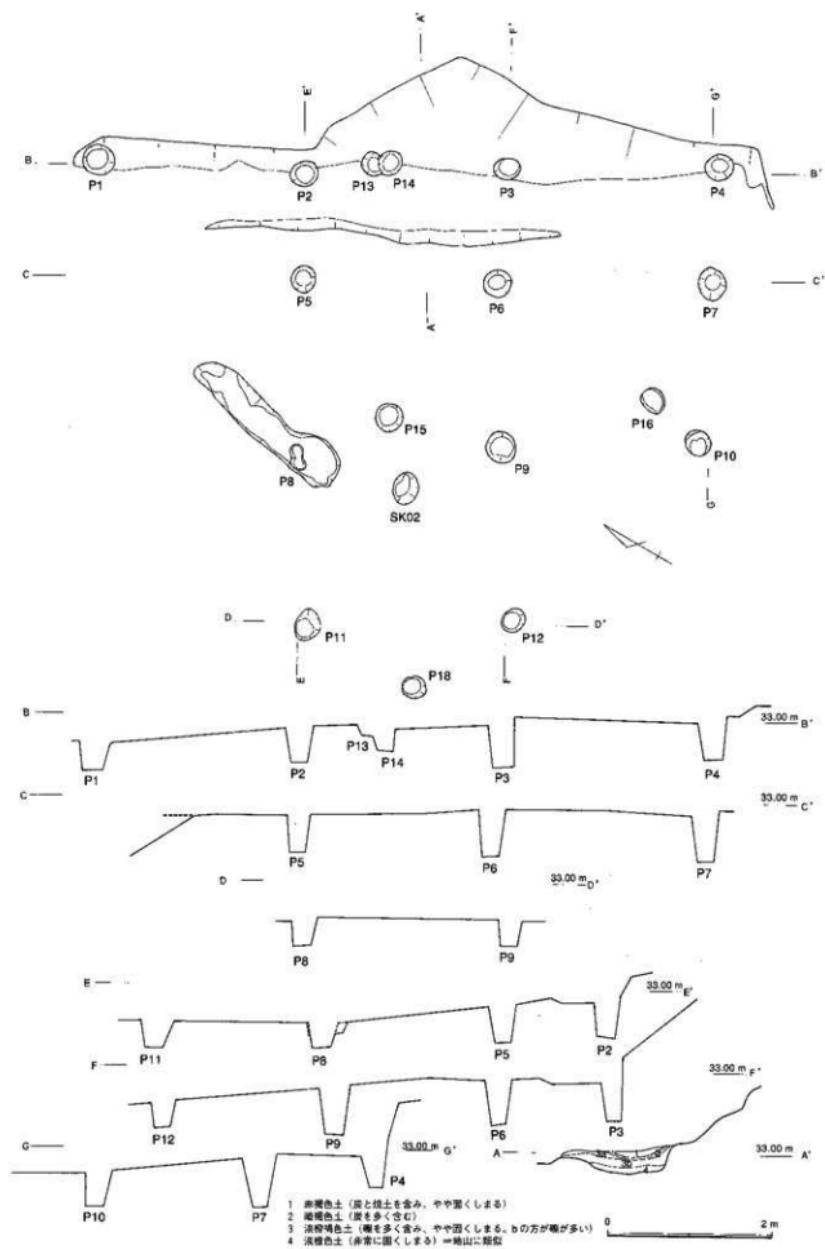
遺構(第201図) 地山を掘り込んだ加工段上に作られた掘立柱建物跡で、北西部は流失しているものである。加工段は、地山から100cm程掘り下げ、南北8.6m、東西6.5m程の平坦面を作りだしたものである。床面は、水平で、壁近くには幅1.5mの浅い凹みが認められた。凹みは、長さ7.7m程まで確認できた。

平坦面からは、ピットを18検出しており、その中で掘立柱建物に伴うと考えられる規則的に並ぶ柱穴は、P 1 ~ P 12と考えられる。これらの柱穴は、大部分が径30cm、深さ30~50cm程のものであり、中には暗褐色土が堆積し、柱痕については確認できるものはなかった。

柱穴から復元される建物は、P 5 ~ P 10及び流失して確認できない南西側の2つの柱穴で構成される桁行3間(7.7m)、梁行2間(2.15m)の建物に、壁際のP 1 ~ P 4で構成される庇用の柱とP 11、P 12で構成される施設が付属したものと推定される。また、柱穴間の距離は、建物と、庇に伴う柱穴間で1.35m、建物と付属施設に伴う柱穴間で2.1m測る。また、建物、庇、付属施設のそれぞれ



第200図 5区西侧尾根周辺遺構配置図 (S = 1:200)



第201図 5区 S B 01 造構実測図 (S = 1:60)

柱穴間は、2.6mを測る。

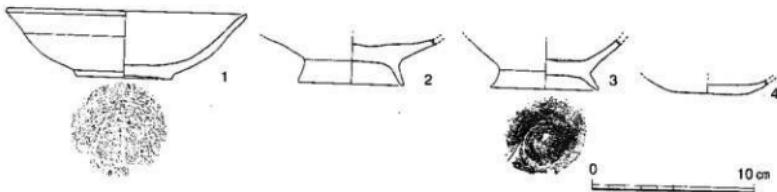
**加工段の覆土**（第201図） 基本的に流土による堆積上であるが、1層は焼土層であり、それは平面的には壁付近からP5、P6付近にまで及ぶものであった。ただし、その範囲は、調査で一部除去しているため、本来は、より広い範囲に及ぶものであった可能性が高い。

**出土遺物**（第202図、第203図） 遺物は、4層上から土師器、鉄器が出上している。土師器（第202図）で図化できたものは、4点存在し、低い高台の壺（1）、脚状の高台が付く壺（2、3）、高台の付かない壺（4）が出土している。それぞれ底部には回転糸切痕が残るもので、時期的には、その形態から平安時代末頃と推測されるものである。

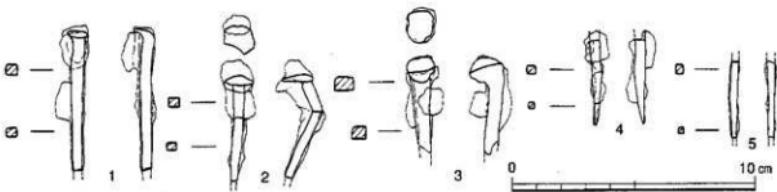
鉄器（第203図）は、5点出土し、すべて、鉄釘と考えられるものである。

また、P8、P9、P11、P12で構成される空間の床面からは、SK02を検出し、八稜鏡と須恵器が出土している。これは、建物に伴う遺構である可能性が高いものである。さらに、周辺の尾根や斜面（5区、6区）からは、同時期と考えられる土師器約80固体と綠釉片が出土し、土師器を廃棄した土壙（SK03）も同一の尾根上で検出している。

以上のことから、検出した遺構は、その立地が丘陵尾根を加工し単独で存在する点、復元される建物が付属施設を備えている点から考えて、一般の集落跡で検出される建物とは、異なるものと考えられる。また、八稜鏡を埋納している土壙が存在することから考えても、特殊な性格を帯びた建物として推測可能である。おそらく、祭祀的な機能をもった建物であり、その祭祀で使用された土師器等は、土壤や周辺に廃棄されたものと考えられる。



第202図 5区SB01出土土師器実測図 (S=1:3)



第203号 5区SB01出土鉄器実測図 (S=1:2)

#### (4) 土 墳

土塚は、総数で10基検出している。殆どのものは、西側の尾根上に立地しているが、SK 01のみは、東側に延びる尾根上で検出したものである。

##### [SK 01] (第206図)

東側尾根上の標高30.5m付近に位置し、4号墳の周溝の外周に近いところで検出した。平面形は、長方形を呈し、上端で長さ1.4m、幅西辺で0.52m、東辺で0.41mを測り、やや西辺が幅が広いものである。床面は、地山から深さ0.3m程掘られ、平坦に加工され、東側へ低く傾斜しており、また、丸刃の工具による加工の痕が認められた。

覆土は、手違いにより、検出した時点では、大部分を取り除いていたために不明確な点が多いが、暗褐色土が堆積しており、木棺痕跡等は確認できなかった。また、遺物等の出土は認められなかった。

時期については、明確に出来ないが、4号墳に伴う壺片

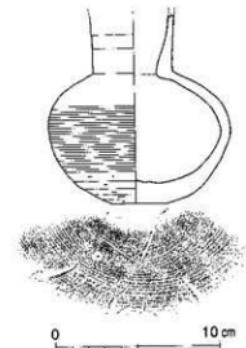
除去後に検出しているので、7世紀前半以前のものである可能性が考えられる。

##### [SK 02] (第204、205、206図)

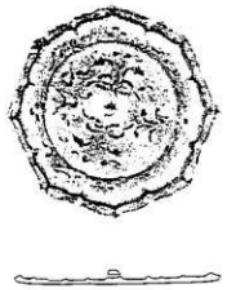
遺構 (第206図) 西側尾根上のSB 01と同一の平坦面で検出した。平面形は、不整形な楕円形を呈し、規模は上端で、長径0.4m、短径0.3mを測る。土塚内には、橙褐色土が堆積し、人為的に埋められたものと推定される。また、土塚内からは、須恵器の壺と八稜鏡が埋葬された状態で出土している。須恵器は口縁を打ち欠いた状態のもので、やや傾いた状況で、八稜鏡は、銳面を上にした状況で出土している。

遺物 (第204、205図) 須恵器 (第204図) は、小形の壺または、平瓶と考えられるものである。肩部には、「×」のヘラ記号が施されたもので、時期としては7世紀前半頃と推定されるものである。

八稜鏡 (第205図) は、径8.6cmの小形のもので、外縁の断面は三角形を呈し、外形は、八稜がしっかりとした円弧で構成されず、八角形に近い平面形である。また、界縁 (内区) の形は、径5.6cmの円形のもので、中央の紐座は粗紐となる。紋様は、外区で、唐草紋と点紋が交互に8個所、内区で、瑞花紋と唐草紋が交互に配置されるものである。これは、杉山洋氏の形式編年のV式 (註1) に相当し、時期的には、他の類例から考えて、11世紀代と考えて良いものと考えられる。



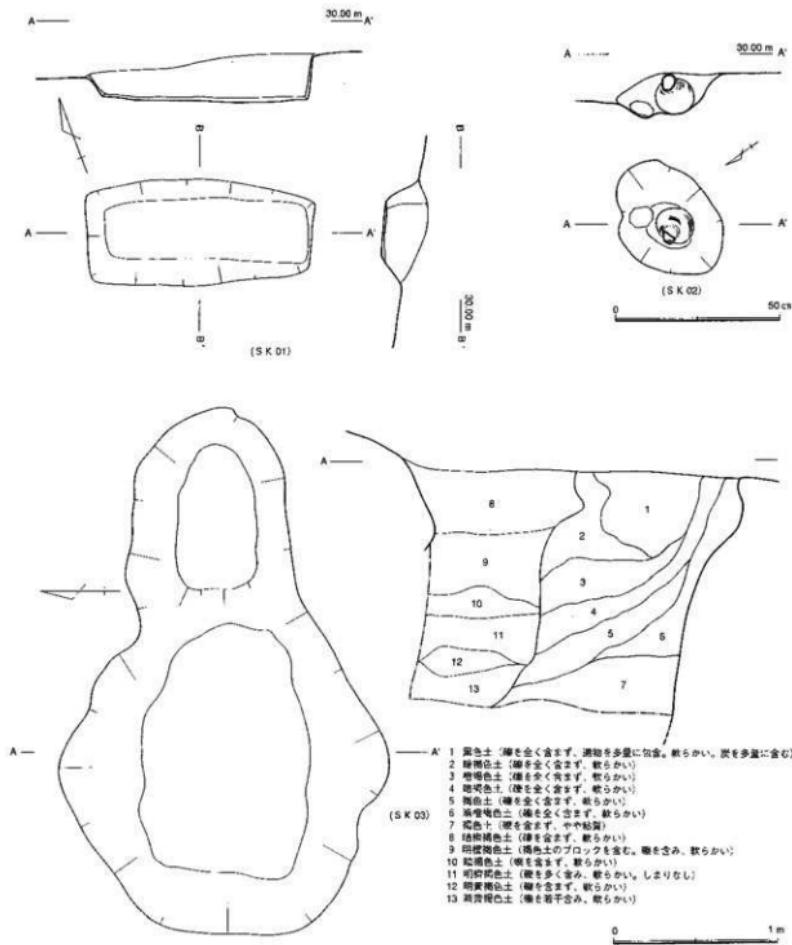
第204図 5区SK 02出土須恵器実測図  
(S=1:3)



第205図 5区SK 02出土八稜鏡 (S=2:3)

以上、出土遺物について述べたが、須恵器と鏡の年代が大きくかけ離れている点が問題として残るが、おそらく須恵器は、周辺に存在する横穴墓で使用されたものが、鏡の時に転用されているのではないかろうか。

**性格と時期** 遺構の時期については、八稜鏡の年代から11世紀代以降のものとして考えられる。性格については、健物に伴うものと考えた場合、地鎮具等の祭祀的意味合いをもったものと推定される。

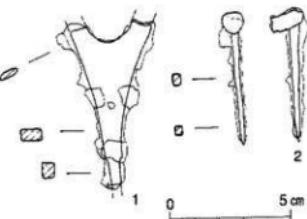


第206図 5区土壤 (SK 01・02・03) 遺構実測図 (S=1:30)

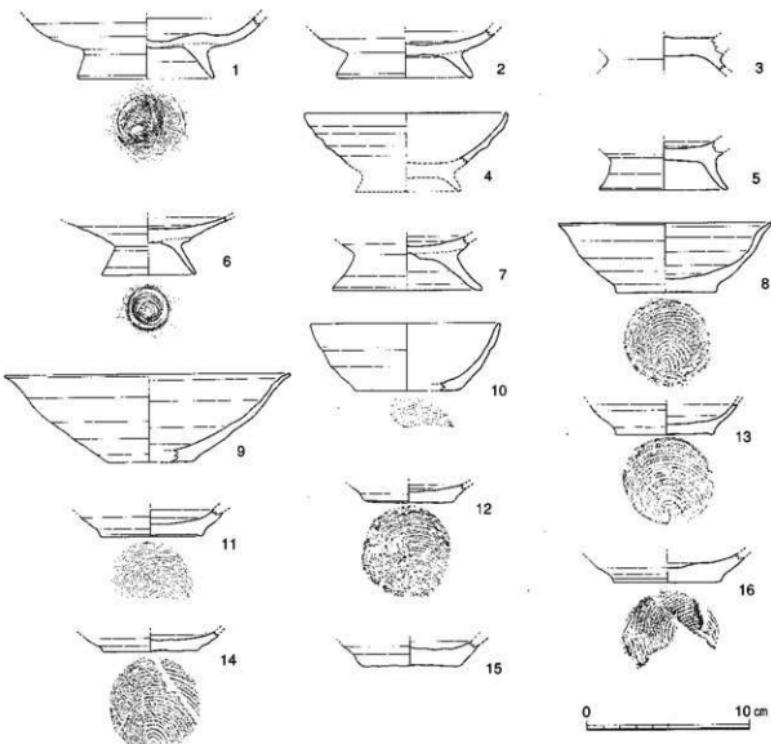
[SK 03] (第206図)

西側尾根上で検出し、S B 01 から西へ 6m 程の標高32.5m付近に立地している。また、この付近の地下には、4号横穴で検出したものと同一のトンネル状の横穴が存在し、それは、無数に掘られている可能性が高い。このことから、土壌床面は、落盤により崩壊し失われていた。また、調査も地山まで確認することを断念し、深さ1.45mで終了している。

現状での平面形は、不整形な橢円形を呈し、規模は上端で、長径3.2m、短径2.0mを測る。覆土からは、上層の黒色土から多数の土師器(第208図)と鉄器(第207図)が出土し、また、下層の7層からは、須恵器片が出土している。このことから、須恵器窯の時期(古墳時代後期)の土壤と土師器の時期(平安時代



第207図 5区SK 03出土鉄器実測図 (S=1:2)



第208図 5区SK 03出土土師器実測図 (S=1:3)

後半）の土壌が切り合い関係にある可能性が考えられる。また、平安時代の土壌は、SK 01 と関連したものと考えられ、SK 01 で使用された土師器等を廃棄した土壌の可能性が高い。

#### [SK 04] (第209図)

西側尾根上の標高29.5m付近で検出した土壌である。平面形は、不整な梢円形を呈し、上端で長さ1.57m、幅0.98m、深さ1.05mを測る。そして、西壁側には幅0.23m、長さ0.68mの三日月状の平坦面が作り出された後に、床面にいたり、階段上を呈している。また東壁には床面から横穴が穿たれ、奥に続くものであったが、手前側一部を調査しただけである。横穴は、高さ0.4m、幅0.55m、奥行き0.3m以上を測るものである。土壌内の覆土は、基本的に自然堆積によるものと推定され、遺物は出土しなかった。時期については、不明である。

#### [SK 05] (第209図)

西側尾根上の標高29.5m付近で検出し、SK 04 の北側に存在する土壌である。平面形は、不整な梢円形を呈し、上端で長さ2.25m、幅1.18mを測る。覆土は、下層で地山ブロックを含む層が認められ、また壁は深くなる程広がるものであったことから、地下にトンネル状の横穴が存在し、それが落盤しているものと考えられた。よって床面については、深さ0.7mのところで調査を中止した。

#### [SK 06] (第209図)

西側尾根上の標高29.5m付近で検出し、SK 04、05 の間に存在する土壌である。平面形は、不整な梢円形を呈し、上端で長さ1.37m、幅0.65m、深さ0.68mを測る。南壁にはSK 04 と同様なトンネル状の横穴が穿たれていたが、調査は一部だけ行なった。また、覆土は、自然堆積土と考えられ、遺物の出土はなかった。なお、時期、性格ともに不明なものである。

#### [SK 07] (第209図)

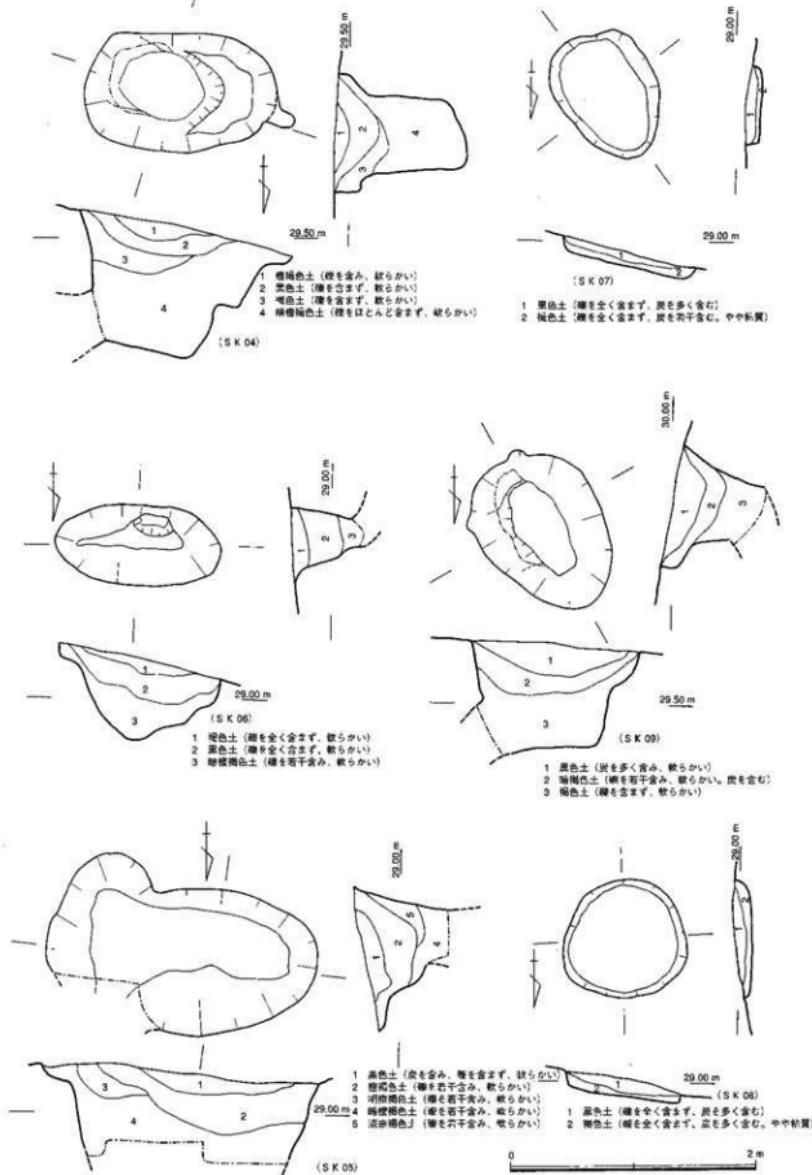
西側尾根上の標高29.0m付近で検出した土壌である。平面形は、不整な梢円形を呈し、上端で長さ1.2m、幅0.8m、深さ0.12mを測る浅いものである。覆土は、自然堆積土と考えられ、遺物の出土はなかった。時期、性格ともに不明なものである。

#### [SK 08] (第209図)

西側尾根上の標高29.0m付近で検出し、SK 07 の南側に存在する土壌である。平面形は、不整な梢円形を呈し、直径1.00m、深さ0.15m程度を測る浅いものである。覆土は、自然堆積土と考えられ、遺物の出土はなかった。時期、性格ともに不明なものである。

#### [SK 09] (第209図)

西側尾根上の標高30.0m付近で検出し、SK 08 の南に存在する土壌である。平面形は、不整な梢円形を呈し、上端で長さ1.39m、幅1.03m、深さ0.87mを測り、北東壁にはSK 04 と同様なトンネル状の横穴が穿たれていたが、調査は一部だけ行なった。また、覆土は、自然堆積土と考えられ、遺物の出土はなかった。なお、時期、性格ともに不明なものである。



第209図 5区土壤 (SK 04・05・06・07・08・09) 実測図 (S = 1:40)

[SK 10] (第210図)

西側尾根上の南側斜面上方の標高29.5m付近で検出した土壤である。平面形は、不整な円形を呈し、径1.3m、深さ0.6m程度を測る。覆土は、自然堆積土と考えられ、上層は黒色を呈す土であり、須恵器焼片が出土している。時期については、明確にできないが、須恵器焼片が出土していることから6世紀後半～7世紀前半頃と推測される。

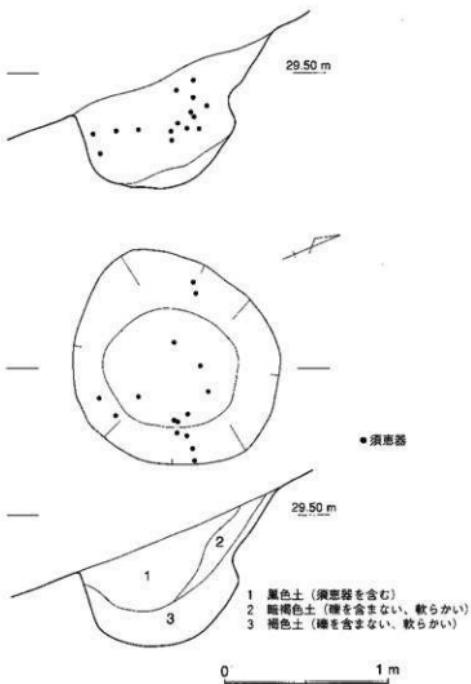
[SX 01] (第211図)

5区西側尾根に設定した主軸ベルトの上層観察によって確認したものである。盛土の痕跡と上層と推定されるものが存在しているが、実態については、不明なものである。

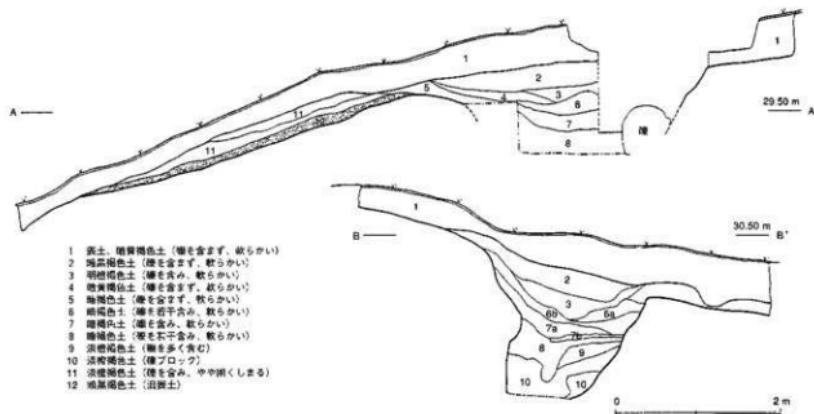
盛土は、尾根の中軸に沿った上層(A-A')で確認し、旧表土の上面で厚さ20cm程の淡橙褐色土が盛られていた。また、長さ3.5m程にわたり認められ、丘陵の尾根の高い部分では、土壤状の落ち込みに対応するかのように見られなくなるが、果たして、互いに関連をもつたものであるかは、不明である。

土壤状の落ち込みは、不整形なもので、尾根主軸土層(A-A')で上端4m、尾根横断土層(B-B')で、上端2mを測る。深さは、1.7mまで調査した時点で中止している。覆土は、上層(2～8層)については堆積土と考えられるが、下層(9～10層)については、地山ブロックを多く含む層であり、可能性として本来の地山床面が陥没しているものと考えられる。おそらく同一尾根の地下に存在しているトンネル状の横穴の崩落によるものと考えられる。

また、土壤内覆土からは、須恵器子持壺(第298図1)が出土している。子持壺は、南側斜面(6区)に存在する14号横穴墓でも出土しており、それと関連性の高いものと考えられる。このことから、土壤状の落ち込み部分は、6世紀後半～7世紀前半頃の時期が想定される。



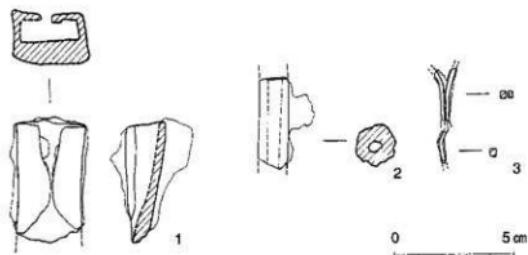
第210図 5区土壤 (SK10) 実測図 (S=1:30)



第211図 5区S X 01土層実測図 (S = 1:60)

### (5)遺構外遺物

本調査区では、遺構に伴わない遺物がいくつか存在している。鉄器（第212図）は、鉄斧（1）、中空の円柱状品（2）、釘（3）が出土している。この中で鉄斧は、2号墳周辺で出土しており、本来は、伴うものであった可能性が考えられる。また、古銭（第213図）は、2点出土し、「天宝通寶」、「永樂通寶」である。



第212図 5区出土鉄器実測図 (S = 1:2)



第213図 5区出土古銭 (S = 2:3)

## (6) 小 結

以上述べたように本調査区からは、古墳、横穴墓、掘立柱建物跡、土壙を検出した。この中で、横穴墓及びそれに伴う古墳について、以下、その成果と問題点について簡単に整理しておきたい。

### [横穴墓]

本調査区では、2基の横穴墓とそれに伴う可能性が高い古墳を1基検出している。他の地区で検出した支群に比し少數であり、ちょうど小支群程度に対応するものと考えられる。時期的には、1号横穴墓は大谷4期の築造で、埋葬も4期の中で終了しているものと考えられ、これに9号墳が伴う可能性が高いものと推定している。また、2号横穴墓は大谷3期の築造で、埋葬も大谷3期で終了しているものと考えられる。以上の横穴墓の時期的な様相から、2号横穴墓の埋葬終了後に1号横穴墓は築造されたものと考えられ、両者に世代墓的な関係を推定することが出来るものである。このような小支群構成は、1区、6区等でも認められ、島田池遺跡の横穴墓群の一つの特徴として挙げられるものである。

両横穴墓の形態を比較してみると、玄室が丸天井である点、閉塞に削石を使用する点等で共通している。ただし、閉塞部の構造がやや異なり、1号横穴墓では渓道状の構造をとっている。はっきりと渓道と認識できる構造をとる横穴墓とは異なるが、単純構造のものとの中間的な様相を見て取ることが出来るものである。

### [古墳（後背墳丘）]

本調査区で検出した古墳は10基にのぼり、その殆どが横穴墓を主体部とする可能性が高いものである点が特徴的である。また、古墳もその様相に以下に述べるように共通点が見られる。

立地—丘陵尾根の主軸より横穴墓の存在する斜面に片寄っている。

墳丘—墳丘の形が確認されているものは、前方後方形、方形のものだけであり、円形のものは含まない点が認められる。

遺物—須恵器鏡片が周溝と墳裾から多数出土しており、下方の横穴墓出土上の破片と接合している。

以上の点が共通して見られる点であり、また、他地区的様相とも一致し、島田池遺跡の横穴墓群に伴う古墳の特徴として挙げられる。これについては、今後、他地域の横穴墓群の様相と比較検討していく必要があると考えられる。

#### (註)

1. 杉山 洋『「今様の鏡」と「古鉢の鏡」—出土八稜鏡より見た平安時代の鏡—』

〔MUSEUM〕No.481 1991年

第76表 5区後背墳丘出土土器観察表（2号填）

(単位: cm)

番号	器種	径 口径 直徑 横径 縦径	形態 高さ 幅 幅大花 縦径	特徴	調査 外曲・凹輪など、底部に沈線 内曲・端部と底部に沈線	色 調査 外曲・凹輪など、底部に沈線あり 内曲・凹輪など、静止なし	分類	備考
1	壺	15.0	6.2	12.4	外曲・凹輪など、底部に沈線 内曲・端部と底部に沈線	良好		
2	壺	13.4	3.9	9.6	外曲・凹輪など、底部に沈線 内曲・凹輪など、静止なし	良好		
3	吳須	—	—	11.7	外曲・凹輪など、底部に沈線 内曲・端部・側面に凹輪あり 内曲・凹輪など、静止なし	良好		
4	高台付 尖底盤	14.4	19.5	19.9	—	外曲・底面・側面に凹輪なし 内曲・凹輪なし	良好	
5	土器	—	—	—	外曲・上口なし 内曲・上口なし	良好		
6	不 土器	—	—	—	外曲・内曲とも調整不明	良好		
7	甕	14.4	—	—	外曲・ほり 内曲・へら削り	良好		
	甕牛玉器			4.5				

第77表 5区1号横穴墓出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	径 口径 横幅 縦幅 縦径	形態 高さ 幅 幅大花 縦径	特徴	調査 外曲・2条沈線 方面・端部に浅い沈線1条	色 調査 外曲・丁寧な凹輪へら削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	分類	備考
1	环盖	11.8	4.8		外曲・2条沈線 方面・端部に浅い沈線1条	良好	(A 4)	
2	环蓋	11.6	3.4		外曲・2条沈線 方面・端部に浅い沈線1条	外曲・底い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
3	环身	12.1	—	14.1		外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし	良好	(A 4) 有茎龜环の可能性あり
4	环身	10.3	—			外曲・凹輪なし 内曲・凹輪なし	良好	(A 4)
5	环环 (脚部)	—	—	10.2	溝はし、2段3方(上小腹、下三角)、 沈線1条	外曲・凹輪なし 内曲・凹輪なし	良好	(C ?)
6	环蓋	13.2	4.4		2条沈線	外曲・J字型凹輪へら削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
7	环身	11.1	4.0	13.7		外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
8	环蓋	10.2	4.0		外曲・2条沈線 内曲・端部に浅い沈線1条	外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
9	环身	10.2	4.8	13.0		外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
10	环蓋	12.3	4.0		外曲・2条沈線 内曲・端部に浅い沈線1条	外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
11	环蓋	12.0	4.6		2条沈線	外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
12	环蓋	12.4	4.4		外曲・2条沈線 内曲・端部に浅い沈線1条	外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
13	环身	10.4	4.5	13.5		外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
14	环身	10.6	4.0	13.0		外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 4)
15	环身	10.5 <small>脚部</small>	3.8	13.4		外曲・丁寧な凹輪へら削り、凹輪なし 内曲・山根なし、静止なし	良好	(A 4)
16	环身	9.7	3.5	12.9		外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 5)
17	环蓋	12.3	4.1		外曲・1条沈線 内曲・端部に沈線1条	外曲・やや荒い削り、凹輪なし 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	(A 5)
18	环 土器	—	—	4.6		外曲・凹輪なし、凹輪あり 内曲・凹輪なし、静止なし	良好	
19	环 十脚	—	—	4.5	高台付	外曲・内曲とも風化により調査不明	良好	
20	环 土器	—	—	5.1	高台付	外曲・凹輪なし、底部凹輪あり後 静止なし、内曲・凹輪なし	良好	

第78表 5区1号横穴墓出土鐵器観察表

(单位: cm)

番号	器種	全長	頭部長 (方頭部)	刃幅	頭厚	方頭厚	頭厚	備考
1	大刀	86.1	68.2	3.2	1.9	0.7	0.7	茎の木質残存、巴釘穴2箇存、全体的に著しい腐食
2	鐮	長径 7.5	短径 6.0	—	—	0.5	—	
3	柳尻金具	3.0	—	—	—	—	—	黒目釘2
4	鉄鎌	13.3	2.7	1.3	0.4	0.3	0.3	茎部の木質残存
5	鉄鎌	13.6	1.7	1.0	0.3	0.3	0.3	茎部の木質残存
6	鉄鎌	11.3(鉄)	3.1	1.1	0.4	0.3	0.3	茎部欠
7	鉄鎌	9.2	4.5	1.7	0.5	0.3	0.3	茎部の木質残存
8	刀下	7.7	—	0.9	0.9	0.3	0.3	柄の木質残存

第79表 5区1号横穴墓出土耳环观察表

(单位: mm)

番号	品種	a	b	c	d	e	備考
-7	金環	22.0	24.0	14.4	6.6	5.2	

第80表 5区2号横穴墓出土土器觀察表

(單位: cm)

番号	品種	法 基			形質上の特徴	調 査	色 調 成	分類	備 考
		門別	固有	固有性					
1	环茎	13.8	4.6		外面・2条沈縫 内面・端部に沈縫1条	外面・丁寧な回転へら割り、回転などで、内面・端部など、静止などで、外縫・やや浅い割り、回転などで内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
2	环茎	14.0	4.4		内面端部は段状	外縫・やや浅い割り、回転などで内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
3	环茎	13.8	4.6		外面・2条沈縫 内面・端部は段状	外縫・やや浅い割り、回転などで内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
4	环身	11.5	4.2	14.5		外面・丁寧な回転へら割り、回転などで、内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
5	环身	12.0	4.7	14.5		外縫・やや浅い割り、回転などで内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
6	环茎	13.8	3.8		外面・2条沈縫 内面・端部に沈縫1条	外縫・やや浅い割り、回転などで内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
7	环身	11.2	4.1	13.7		外縫・やや浅い割り、回転などで内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
8	环身	11.2	3.7	14.3		外縫・丁寧な回転へら割り、回転などで、内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
9	环身	12.0	4.0	14.7		外縫・やや浅い割り、回転などで内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
10	环身	11.6	4.6	14.1		外縫・丁寧な回転へら割り、回転などで、内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
11	环茎	13.6	4.0		外面・2条沈縫 内面・端部に浅い沈縫1条	外縫・やや浅い割り、回転などで内面・回転などで、静止などで	良好	(A 3)	
12	細密型	10.2	21.5	25.5	外縫・附着・2条沈縫の間に横枝支 内面・端部に沈縫1条	外縫・回転などで、体部かきめ内面・回転などで、静止などで	良好		
13	底上側	10.2	9.5	12.5	6.0	外縫・回転などで、かきめ、回転へら割り、内面・回転などで、静止などで	良好		

第81表 5区2号横穴墓出土玉類觀察表

(单位: mm)

品名	単位	材質	色調	長さ	幅	厚さ	備考
-1 小玉	ガラス	透明	3.1	2.3	1.0		

番号	品種	材質	色調	長径	幅径	孔径	備考
-2	小玉	ガラス	藍	3.1	2.3	1.0	
-3	小玉	ガラス	藍	3.5	2.0	1.0	
-4	小玉	ガラス	藍	3.4	2.5	1.2	
-5	小玉	ガラス	藍	3.2	2.4	1.1	
-6	小玉	ガラス	藍	3.3	2.1	1.1	
-7	小玉	ガラス	藍	3.2	2.3	1.1	
-8	小玉	ガラス	藍	3.3	2.4	1.2	
-9	小玉	ガラス	藍	3.2	2.0	1.2	
-10	小玉	ガラス	藍	3.2	2.4	1.1	
-11	小玉	ガラス	藍	3.1	2.5	1.2	
-12	小玉	ガラス	藍	3.0	2.3	1.1	
-13	小玉	ガラス	藍	3.2	2.6	1.2	
-14	小玉	ガラス	藍	3.3	2.6	1.0	
-15	小玉	ガラス	藍	3.4	2.0	1.3	
-16	小玉	ガラス	藍	3.3	2.4	1.1	
-17	小玉	ガラス	藍	3.2	2.8	1.1	
-18	小玉	ガラス	藍	3.2	2.5	1.2	
-19	小玉	ガラス	青	3.5	2.3	1.2	
-20	小玉	ガラス	青	3.0	2.4	1.1	
-21	小玉	ガラス	藍	3.2	2.7	1.3	
-22	小玉	ガラス	青	3.4	2.1	1.2	
-23	小玉	ガラス	青	3.1	2.4	1.0	
-24	小玉	ガラス	藍	3.2	2.6	1.1	
-25	小玉	ガラス	青	3.2	2.7	1.1	
-26	小玉	ガラス	青	2.9	2.7	1.1	
-27	小玉	ガラス	藍	3.2	2.1	1.2	
-28	小玉	ガラス	藍	3.2	2.1	1.0	
-29	小玉	ガラス	藍	3.1	1.9	1.2	
-30	小玉	ガラス	藍	3.7	2.6	1.2	
-31	小玉	ガラス	藍	3.2	2.3	1.1	
-32	小玉	ガラス	青	3.1	2.5	1.2	
-33	小玉	ガラス	藍	3.3	2.2	1.2	
-34	小玉	ガラス	青	3.2	2.1	1.2	
-35	小玉	ガラス	青	3.3	2.4	1.2	
-36	小玉	ガラス	青	3.2	2.2	1.1	
-37	小玉	ガラス	藍	3.1	2.7	1.2	
-38	小玉	ガラス	青	3.2	2.4	1.1	

番号	器種	材質	色調	長径	短径	孔径	備考
-39	小玉	ガラス	黒	3.2	2.3	1.0	
-40	小玉	ガラス	黒	3.2	2.5	1.0	
-41	小玉	ガラス	黒	3.2	2.2	1.1	
-42	小玉	ガラス	黒	3.2	2.5	1.2	
-43	小玉	ガラス	黒	3.2	2.8	1.2	
-44	小玉	ガラス	黒	3.8	2.0	1.3	
-45	小玉	ガラス	黒	3.2	2.2	1.2	
-46	小玉	ガラス	黒	3.5	2.4	1.0	
-47	小玉	ガラス	黒	3.4	2.0	1.2	
-48	小玉	ガラス	黒	3.1	2.8	0.9	
-49	小玉	ガラス	黒	3.5	2.4	1.0	
-50	小玉	ガラス	黒	3.5	2.5	1.1	
-51	小玉	ガラス	黒	3.5	2.6	1.0	
-52	小玉	ガラス	黒	3.5	2.7	1.2	
-53	小玉	ガラス	黒	3.0	2.3	1.2	
-54	小玉	ガラス	黒	3.1	2.2	1.1	
-55	小玉	ガラス	黒	3.1	2.4	1.0	
-56	小玉	ガラス	黒	3.2	2.1	1.2	
-57	小玉	ガラス	黒	3.4	2.4	1.0	
-58	小玉	ガラス	黒	3.3	2.0	1.1	
-59	小玉	ガラス	黒	3.4	2.0	1.2	
-60	小玉	ガラス	黒	3.1	1.9	1.0	
-61	小玉	ガラス	黒	3.1	2.7	1.0	
-62	小玉	ガラス	黒	3.0	2.4	1.0	
-63	小玉	ガラス	黒	3.0	2.2	0.9	
-64	小玉	ガラス	黒	3.2	2.1	0.9	
-65	小玉	ガラス	黒	3.2	2.5	0.8	
-66	小玉	ガラス	黒	3.1	2.3	0.9	
-67	小玉	ガラス	黒	3.4	2.5	0.8	
-68	小玉	ガラス	水色	3.8	2.8	1.1	
-69	小玉	ガラス	青	3.7	2.1	1.3	
-70	小玉	ガラス	青	4.1	2.3	1.6	
-71	小玉	ガラス	青	4.3	2.8	1.5	
-72	小玉	ガラス	青	3.7	2.8	1.2	
-73	小玉	ガラス	青	3.7	3.1	1.2	
-74	小玉	ガラス	青	3.7	2.8	1.6	
-75	小玉	ガラス	水色	3.4	2.3	1.4	

番号	器種	材質	色調	直径	厚径	孔径	備考
-76	小玉	ガラス	木色	3.3	2.6	1.2	
-77	小玉	ガラス	木色	3.6	2.5	1.0	
-78	小玉	ガラス	木色	4.0	3.8	1.4	
-79	小玉	ガラス	木色	3.3	2.3	1.4	
-80	小玉	ガラス	木色	3.7	1.9	1.3	
-81	小玉	ガラス	木色	3.2	1.8	1.3	
-82	小玉	ガラス	木色	3.5	2.7	1.3	
-83	小玉	ガラス	木色	3.5	2.1	1.1	
-84	小玉	ガラス	木色	4.0	3.0	1.3	
-85	小玉	ガラス	緑	4.6	2.6	1.1	
-86	小玉	ガラス	淡緑色	3.3	4.0	0.9	

第82表 5区SB01出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法身量			形態上の特徴	調査筆	負調成	分類	備考
		口径	底高	側壁厚					
1	杯	14.8	4.1			外面・凹凸なし、底面凹凸あり 内面・凹凸なし	良好		
2	杯	-	-	6.5		外面・凹凸なし 内面・風化により調査不明	良好		
3	杯	-	-	6.0		外面・凹凸なし、底面凹凸あり 内面・風化により調査不明	良好		
4	杯	-	-	4.0		外面・内面とも風化により調査不明	良好		

第83表 5区SB01出土鉄器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法身量			形態上の特徴	調査筆	負調成	分類	備考
		口径	底高	側壁厚					
-1	鉄釘	5.7(既)	-	-	0.5	-	0.4		
-2	鉄釘	4.3(既)	-	-	0.4	-	0.4		
-3	鉄釘	3.7(既)	-	-	0.8	--	0.7		
-4	鉄釘	3.6(既)	-	-	0.4	-	0.4		
-5	鉄釘	3.1(既)	-	-	0.3	-	0.4		

第84表 5区SK02出土土器観察表

(単位: cm)

番号	器種	法身量			形態上の特徴	調査筆	負調成	分類	備考
		口径	底高	側壁厚					
1	直口壺	-	-	11.2		外面・凹凸なし、かきめ、回転へら削り、内面・凹凸なし	良好		右部にへら記号×

第85表 5区SK03出土鉄器観察表

(単位:cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刃部)	刀幅	頭部	刃部厚	裏厚	備考
-1	鉄鋸	6.6(頭)	-	0.9	0.5	0.3	0.7	刃部・先端部欠
-2	鉄釘	5.6	-	-	0.3	-	0.4	先端 頭部は膨らみ、巾は中洞

第86表 5区SK03出土土器観察表

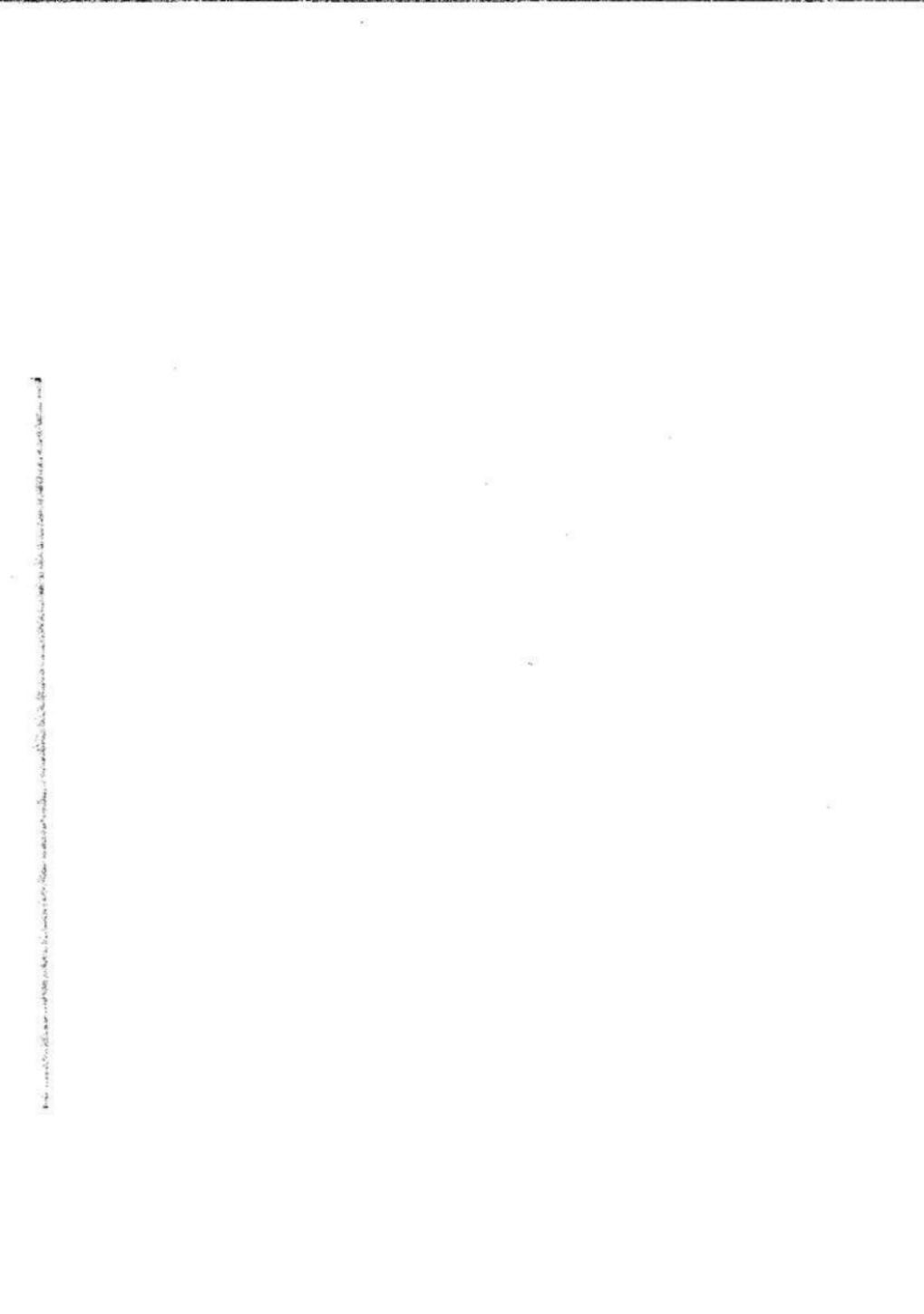
(単位:cm)

番号	器種	法 1口径 2底高 3最大径 4脚延	備	形態上の特徴	調査概要	色調 使用	分類	備考
1	环 土器	-	-	8.4	外面・回転なしで、底部回転糸引き 内面・回転なしで、静止なし	良好		
2	环 土器	-	-	8.4	外面・回転なしで 内面・なしで	良好		
3	环 土器	-	-	-	外面・内面とも風化により調整不明	良好		
4	环 土器	12.5	-	-	外面・回転なしで 内面・回転なしで	良好		
5	环 土器	-	-	-	外面・回転なしで 内面・回転なしで	良好		
6	环 土器	-	-	8.0	外面・10周なしで、底部回転糸引き 内面・回転なしで	良好		
7	环 土器	-	-	9.3	外面・10周なしで 内面・回転なしで	良好		
8	环 土器	13.2	4.2	-	外面・回転なしで、底部回転糸引き 内面・回転なしで	良好		
9	环 土器	17.7	5.3	5.3	外面・内面とも風化により調整不明	良好		
10	环 土器	11.8	4.1	6.3	外底・回転なしで、底部回転糸引き 内面・風化により調整不明	良好		
11	环 土器	-	-	6.3	外底・回転なしで、底部回転糸引き 内面・なしで	良好		
12	环 土器	-	-	5.5	外底・回転なしで、底部回転糸引き 内面・なしで	良好		
13	环 土器	-	-	6.0	外面・回転なしで、底部回転糸引き 内面・なしで	良好		
14	环 土器	-	-	6.0	外面・回転なしで、底部回転糸引き 内面・なしで	良好		
15	环 土器	-	-	6.0	外面・回転なしで、底部回転糸引き 内面・なしで	良好		
16	环 土器	-	-	6.6	外面・回転なしで、底部回転糸引き 内面・なしで	良好		

第87表 5区号横穴墓出土鉄器観察表 (SB-01)

(単位:cm)

番号	器種	全長	頭部長 (刃部)	刀幅	頭部	刃部厚	裏厚	備考
-1	鉄斧	5.0(頭)	-	2.7	-	0.6	-	錐状鋸刃
-2	不明鉄器	3.6(頭)	-	-	1.3	-	1.7	中は空洞
-3	不明鉄器	3.6(頭)	-	-	0.2	-	0.2	



## **島田池遺跡・鶴貫遺跡**

一般国道9号安来道路建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅱ  
本文編（第1分冊）

1997年3月 発行

発行 建設省松江国道工事事務所  
島根県教育委員会  
編集 島根県埋蔵文化財調査センター  
(〒690-01 島根県松江市打出町33 TEL 0852-36-8608)  
印刷 株島根県農協印刷